江戸名所図会

四国橋の図 四谷大木戸 山王祭 品川宿海晏寺 日本橋

ル 4
3218
2

ル 4
3218
巻 2

昭和九年
七月六日
購求

連ね燈の光ハ玲瓏として流に映せ樓船扁舟所せくとゆきつもどき
一時に水面を覆ひかゝりてあるも陸地に異ならす絃歌鼓吹も
耳に満て囂しく実に大江戸の盛更なり

此人数紅ふきはてゝ柳の郡　廿角

子人うゑを探ねやそしみ　同

この国のこの国ふみゆるとのつゝ水ハ藤根堂と号し狂　芭蕉

清水如水宅地　横山町に住りとのつゝ水ハ藤根堂と号し狂

歌に名あり　常に酒を飲む時ハ清さる時ハ濁りて猥に言語を発

人名付て藤根堂と呼ぶ　按に雄長老ト養又近くハ九州の聖

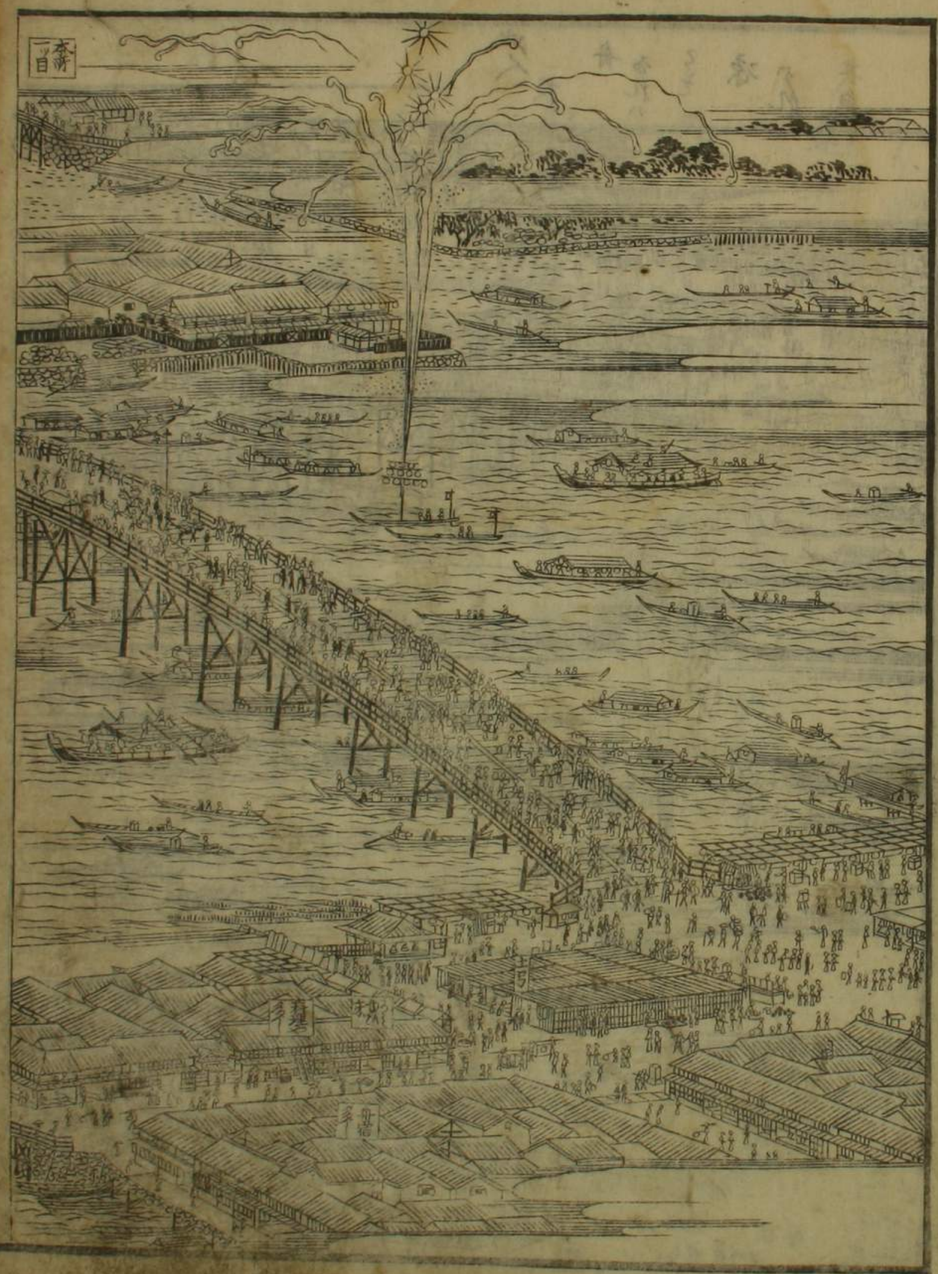
法師抔各狂奇に名あり家集にあれと此如水ハ名さへ人まとをり

如水一時大和國法隆寺に蔵せる不の賢聖の瓢とのゝ器物を

見て後瓢に彫物をなすを得たりとも鉈刀を用ひて

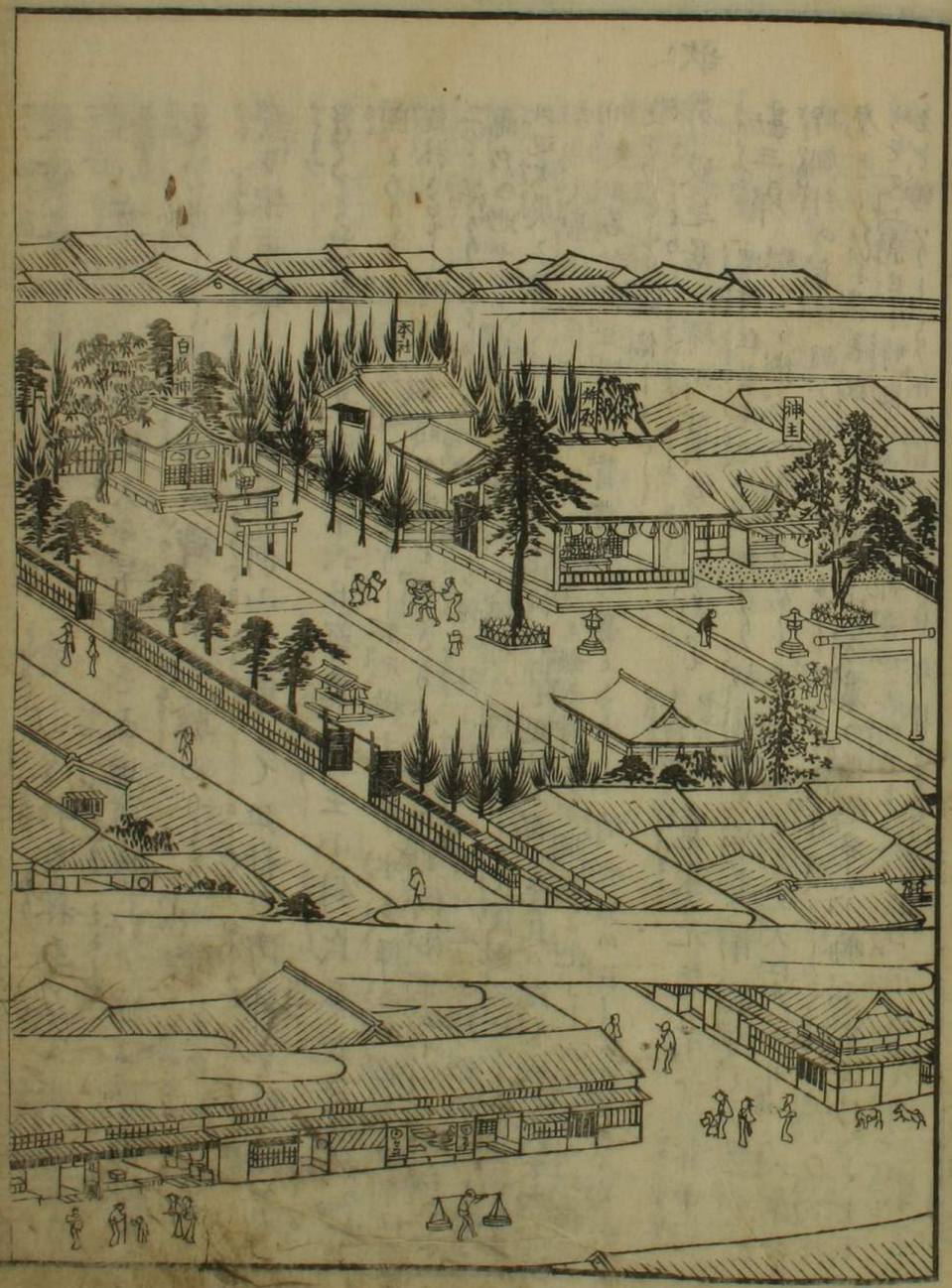
其巧尤絶妙なり依て需多うりれハ此匏瓜の名ハ世に

押へられたりとの意ゆく自ら迷淵蟠鯨候とそ名のゝりる住宅


奇観一百

両國橋
あきうかの角
もゆる火
あきうかの光
元柳橋
新柳橋
十二ノ四十四

より東よ菜研堀と云ふあり其辺知人の許よ行く擬上より
遠近を見やらく
又知るせハ年ち第なり第研堀月ハ白湯あてかけハ水あて
又ある時漁父の辞の意をよめる
世をすてあり釣とりのく濁酒酔てさそらみの水
享保十三年戊申正月三日朝起く
公の雷嵯地震雷火の喪日創鹿狩なき國へゆく
かくるゝ同じ五日の暮方刺頸湯あく〜太神宮を拜し
〜まふ終をとゝもり
年七十二歳今し浅草金竜寺墓碑あり石を以て
記をつくりてとゝのり故よ墓碑ハ一陽如幻庵東湖老和尚此如水の隨筆の
鄙の形よ造立す
相を表しく没後文字を如睡と改めしあり俗よ當社ある所ハ其臨終地
杉森稲荷社　新林木町よあり
社記云此神像を
相馬の将門威を東國ゝ逞しらせ〜頃藤原秀郷朝敵誅伐
の計策を廻らし此神の加護ふ依く遂に将門を亡しらめ



杉森稲荷神社

後霊夢を感し此地に至て稿こゝに杉の森あるを地に崇め祀る
当社寛正の頃東國大に旱魃を太田道灌江戸城にひらく深く
是を患とし此御神に禱に其験あらゝ雨降て百穀大に
登る依て頃山城國稲荷山を模して伍社の御神を勧請し
まつるとなり毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀也 当社始ハ町屋の後
園にあり恭詣の道元禄十六年本多弾正少弼忠晴寺社の
観林に時社へ恭詣の道を開さるゝ元禄十六年菊岡沾涼云此ハ昔杉の木
立こと深くしてゝ又此地の戎古老の話に寛文の頃此地小針飛右衛門と云る
商戸の地に彼宅地にあるし後延宝七年五月二十九日
此辺火災に依て焦土となりし頃此祠の稲荷の祠現然と残れハ諸人皆これを奇
吉川氏某采信仰し新に堀子姫太神とを相殿に祀ると云又或人云長谷
川町四名を称宜町と云昔當社の纒こゝに時祢宜の住し所なれ故号
とされとも此説信しゝ

歌舞妓芝居 堺町 葺屋町 木挽町 寛永元年甲子の春中村
甚三郎 堺町在言座元の始祖なり初道順と号す 昔禁闕及び宮中に
時禍引の音頭訓を汎ハしめら也宅丸大江戸の川口へ入津の
麾かゝ猿若狂言の衣装及し簾の揚巻等今猶家に伝へ重宝
名を賜 上京せし時勘三郎ハ皆中村座 官府の免許を蒙る

江戸中橋に始て太鼓櫓を揚猿若狂言尽の芝居を興行
也 是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子に云る草紙に寛永より前ハ芝居
町にあるとし記せしハ柴井町のことを云なるへし按に芝居ありしハ
こと後世に至て芝居を柴井に書改めしなるへし又江戸名所に中橋へ
より中橋へ引移しなるへし又堺町へ引移しなるへし
日本橋の西河岸町に芝居を取建るとあり可考寛永十八年の印行のそろ
物語に云る冊子に中橋に米島丹後守奇舞妓ありと高札を建るまてそ
貴賤群集 同九年壬申中橋より祢宜町へ引遂に慶安四年
辛卯今の地に移る 祢宜町を人形町と字ハ今の長谷川町のこと今俗に紫
寛永三十年印本吾嬬鑑に住所ハ人形屋多く住所なり唱へ
又角力外薩摩太夫虎屋操土佐に能なとありる由あるし
趣を挙 又寛永十一年甲戌村山又三郎の者 又三郎と云る者名獲屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山泉州堺より此地に下る公許を得て常
又八と云る者の次男なりしとの芝居を興行し能の狂言を役者をまへ舞子六人に勤
市村羽左衛門座是なり 昔屋町在言座元の興起なり二代目を
勘三郎の門弟なり寛文四年竹之丞と称し堺町狂言座元二代目明石
道具建を製せしに其頃市村座と称し工夫し引幕其後萬治
三年庚子森田太郎兵衛と云る者是も官府の免許により

堺町
葺屋町
猿場
堺町
葺屋町
猿場
堺町
葺屋町
猿場
堺町
葺屋町
猿場
堺町
葺屋町
猿場

猿若狂言之古圖

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といふる者の二男又七とのつるを養子とし名を森田勘弥と改む（木挽町狂言座元なり）

同巻木挽町の下より詳しく其餘堺町菖蒲屋町の間より操座木偶芝居ありて四時より賑ハへり（元禄閑校の江戸鹿子より堺町菖蒲屋町の二丁ハ古へより操見せ物又ハ狂言尽くあるひハ放下の品玉獅子の曲を業とする者とも寄あつまり終日観示を乞ひ江戸名所大薩摩土佐の太夫和泉奏の浄瑠理天満八太夫江戸孫四郎江戸半太夫の説経鶴屋源太郎ら南京あやつりあしくるくるのうせとのあり

しことを為せり

吉原町舊地　和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり（住吉町難波町）

昔の河岸を竈河岸と字ハ竈屋多きあの俗和なり和の小溝ハ則昔の曲輪の外堀ありと云

慶長十七年庄司甚右衛門官府より訴へ願ひ度旨

とのつる者街を一所より定めあらり度旨

初て此地を賜ハり花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸より定まる

たる傾城町もあく二軒三軒つゝかしこふ散在せしゝ其中軒を

並へうしゝハ麹町八丁目あく十四五軒ありく何ゝも京六条より

迁る又鎌倉河岸ゆゝと十四五軒大橋柳町ゆゝと廿軒ありしと云

此大橋と云ハ今の柳町へハ駿府弥勒町より移る至外伏柳町と云ハ道三河岸の辺ゝゝ此柳町へハ慶長十一年の頃見夷町奈良木辻等よりも追く大江戸より移る

柳町の地ハ召上られ元誓願寺前へ引移りしゝ傾城屋とも打寄相談の上場所取立度由願ひ度旨御免なりて庄司甚右衛門初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃何付元和三年霜月地形普請出来て高賣せり江戸町一丁目ハ一統の後初て開基せり

ゆゝかく号け同二丁目ハ鎌倉河岸より引京町一丁目ハ麹町より引同二丁目ハ追くゝ来上方の傾城屋を置て一両年ゆゝて普請悉く成就せしゝハ新町と名付くり角町ハ京橋角町より

うつる寛永三年より至り五町全く家居落成しゝ此に移る

然る明暦二年浅草の後今の地へ迁さんすをやるゝこと

いゝゝも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火より焼亡す

依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る

大門通
音羽地ハ吉原町
あり一頃ハ大
門の通り多り
しかるに今ハ鍋
名つく物屋馬具商
多く住り
江戸の表
平角
菊屋
きくや

普請の間今戸鳥越山谷の間に借宅いたし渡世するものを
ゆるさる花街今に舊地に在るハ戯場相接し滋繁昌を極めん
ためと祝融の祟弥しばしのうれへしばしば彼地へ移されしも
おほやけの御恵いと有難きことなりし

猶六巻新吉原町の条下に詳なり

按に哥舞妓ハ其始遊女より出たる名にして哥ひ舞の妓女なりといふ畧語なり昔ハ高貴の人は愛せられし故にたとへば長門守丹後守抔と呼なりしなるよりおのづから遊女おもひ哥舞妓役者に太夫の称を蒙しとあり故に今狂言座元を太夫元と唱へ若女形の藝に長しものを太夫と呼なり其余風なるべし されど今大江戸にハ遊女に太夫の称をうしなへり寛永十八年の印本そろ〳〵物語といふものまでの吉原細の哥舞妓女を愛長門守杉山主殿米島丹後守などいふこと名を得し遊女あり是等ハ一座の名代かへらく其頃哥舞妓にて和尚と称せしとぞ又日を重ね此町繁昌して町割をなし本町あひ京町江戸町伏見町堺町大坂町墨町新町抔と名付家居美しく軒をならべ草の夜家をあつらへ校書に作まつく又木町を中にこしらへ揚屋町を置き幾筋ともなく横町を設ける能哥舞妓の舞臺をまうけ置ひとへに興行し洛中記せり又江戸名所記等にも遊女等芝居をかまへ哥舞妓をなせしに皆人めでまどひける世のさわぎともなりけれバ是を禁せられしより後ハ若衆哥舞妓と云ことを興行ありしなりしき以年に奇観なり舞せしとあり

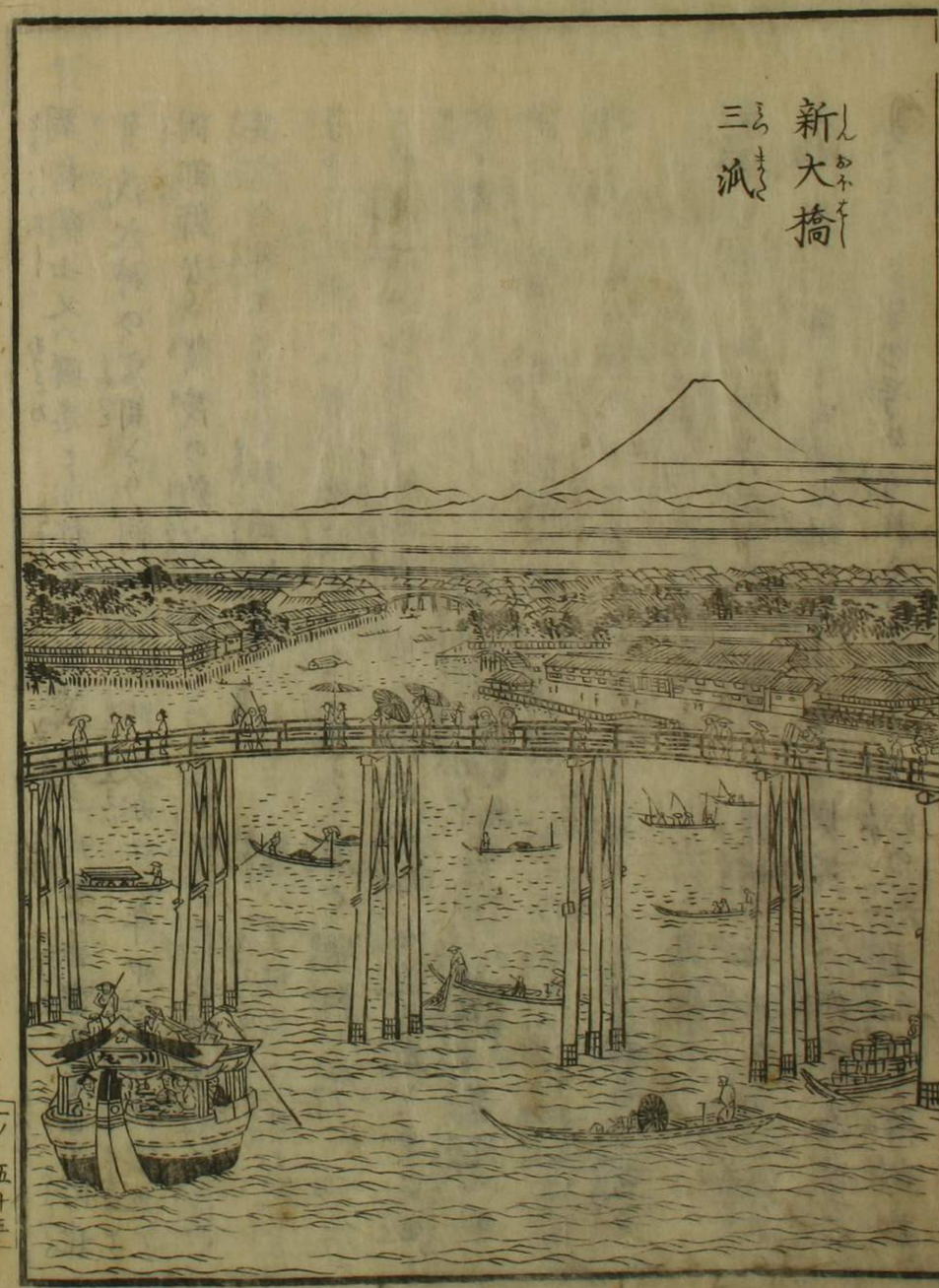
賀茂真淵翁旧居地

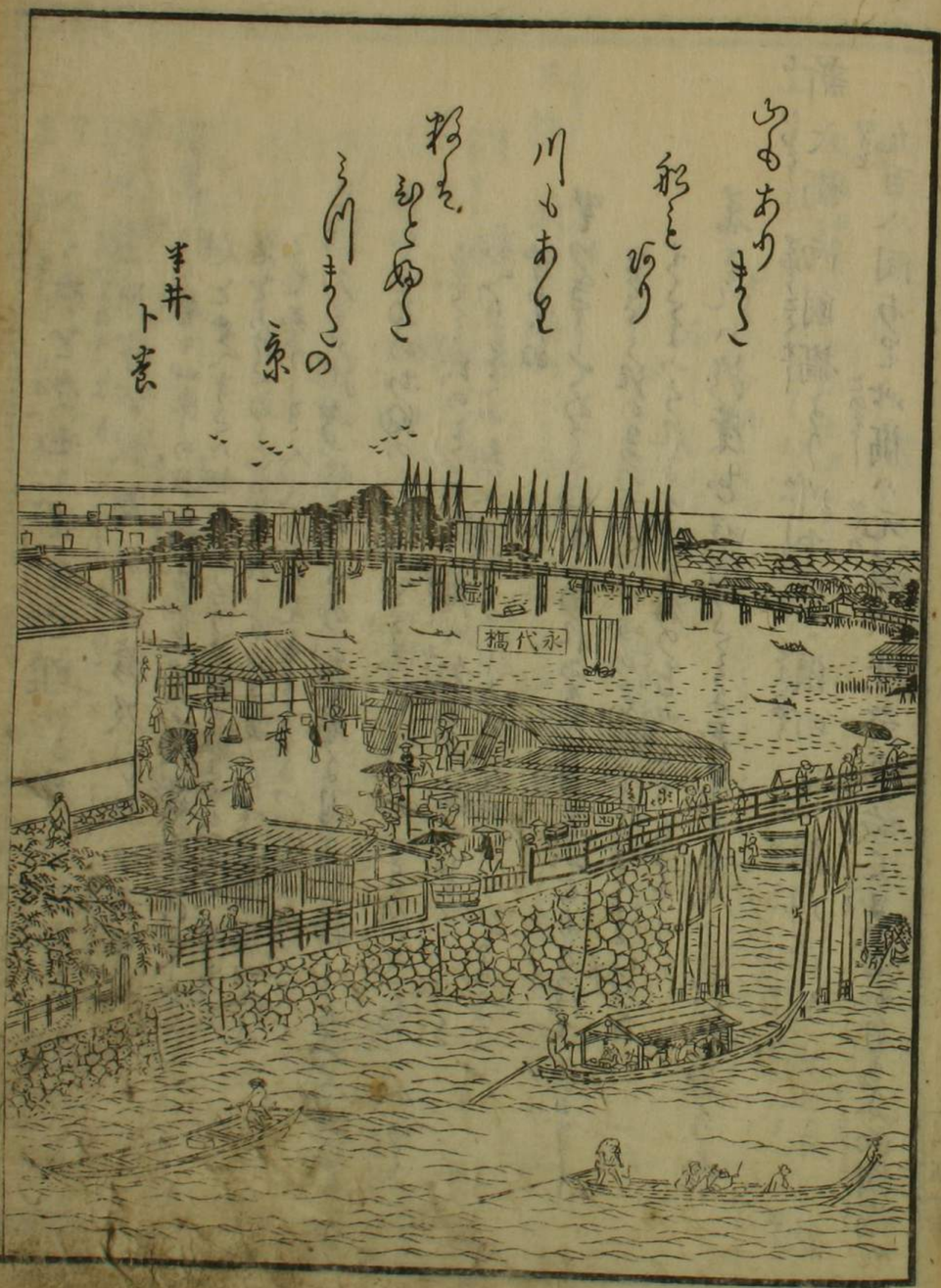
濱町にあり 宝暦十四年此地へうつり住 真淵翁一に まつりし家集にみえたり

岡部衞士又ハ縣居とも称せり賀茂縣主成助の末葉にして世々洛北賀茂大神の宮司たり同師朝の時文永十一年甲戌遠州濱松庄岡部郷なる賀茂の新宮を斎まつるべき詔を蒙りて又彼地を賜ふ其宮の神主となれり即岡部郷に住せり翁ハ其後裔定臣といへる子にて元禄十一年丁丑彼地に生る壮より深く國朝の学に心ざしよせ享保十八年癸丑花洛に至り荷田宿祢春満の教を受け後大に國学を以て世に鳴る 荷田宿祢ハ本姓なり世に羽倉斎宮と称す此人ハ洛南稲荷社の祠官なり 寛延三年庚午大江戸に来り田安の殿の召に應じ古への書の道の博士として特に愛させたまひ其頃御衣を賜りしかバ其かしこまりに和哥を奉る

あがひてふあやれ御衣を氏人のかづくものと誰かしりけん

其後宝暦十年庚辰仕をかへし奉りて濱町に隠栖す翁を縣居と唱ふるハ庭を田居の様に作りしも賀茂氏の姓にも縁あれバとぞまうす家の号に呼れしとなり 生涯の著述凡六十餘部其


新大橋
三流


永代橋
京
半井卜養

門に入る教を受世に其名を聞る者本居宣長橋千蔭平
春海藤原宇万伎揖取魚彦及ひ倭文女等之
家集

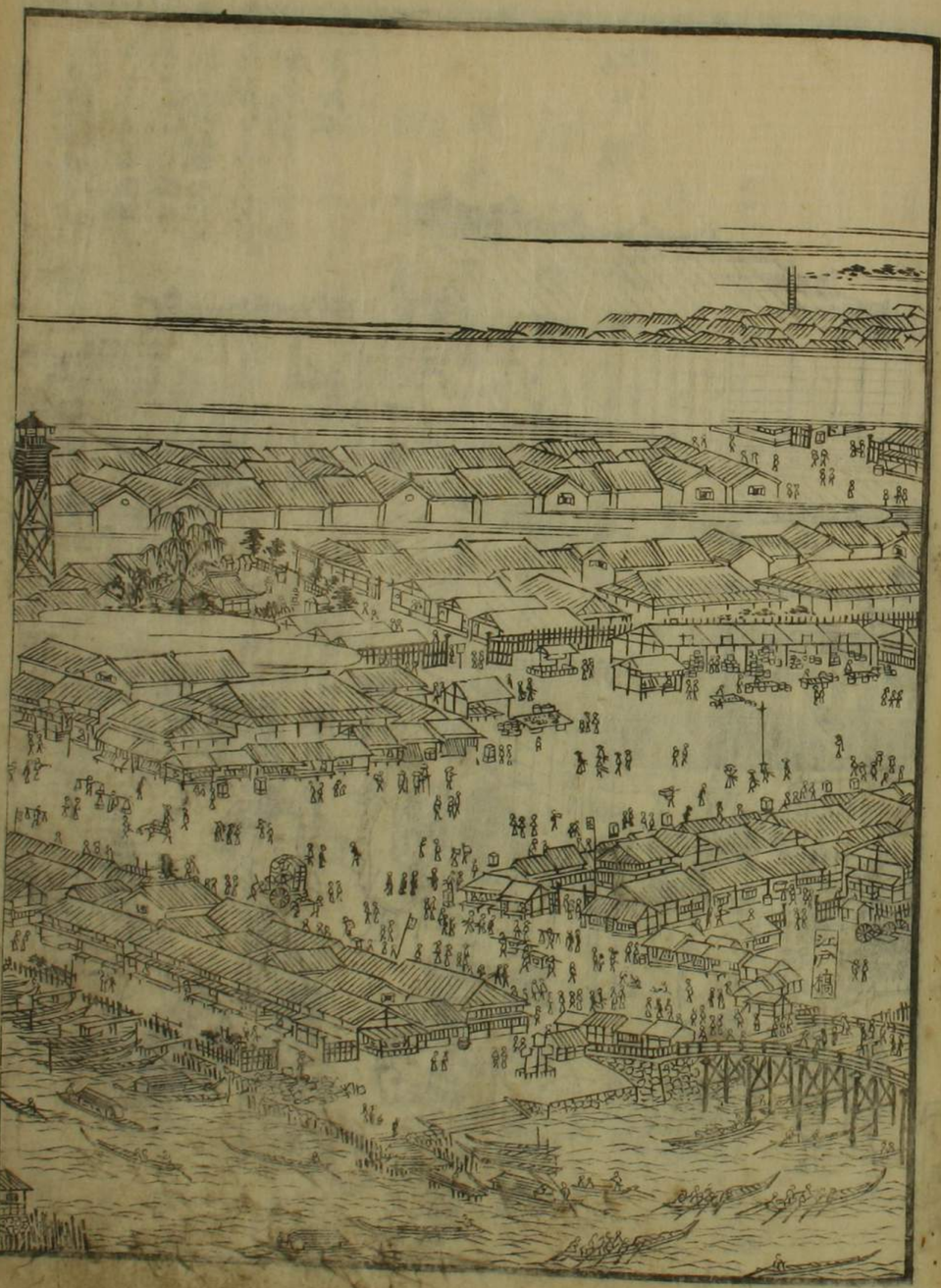
[illegible]十四年の秋演[illegible]
庭と世へまさハ畑に[illegible]
[illegible]九月十三夜[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

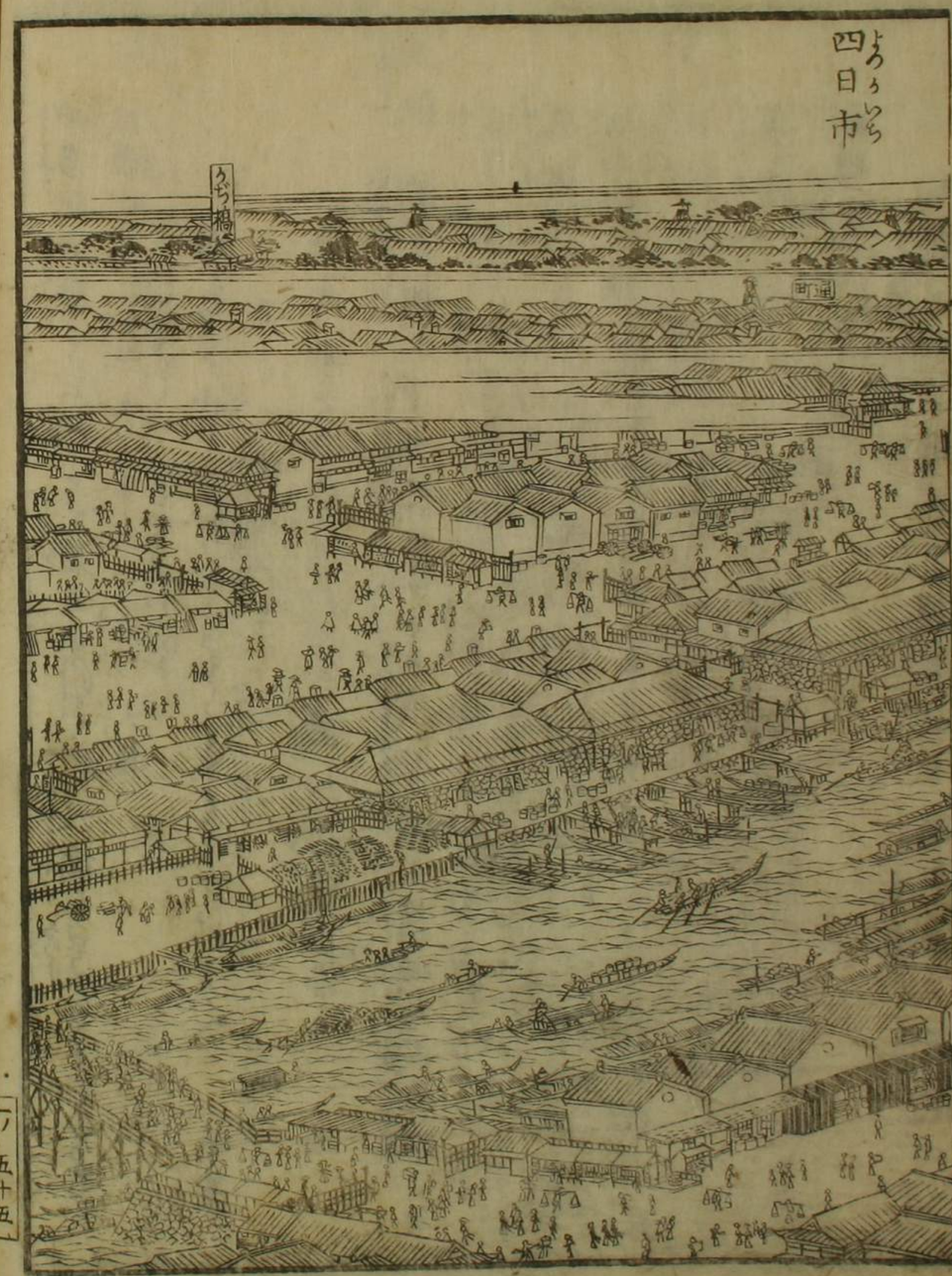
新大橋　両國橋より川下の六間濱町より深川六間堀へ架す長
九百八間あり此橋ハ元禄六年癸酉始て是をかけ[illegible]両國橋の

旧名を大橋と云故に名よりて新大橋と号らるるなり
風羅袖日記　元禄五中年の[illegible]深川大橋
[illegible]

初[illegible]　芭蕉
[illegible]
[illegible]
[illegible]　仝

三汐　新大橋の下分流の所を云浅草川と箱崎の間の流とのかたを流るるハ別に水とのつれ流と云ハ汐と此所ハ月に名所なり　因に云明和八年辛卯中流を埋埋しく居とし中洲と称せり
堀立昔ハ多く遊女奇舞妓の類ひこふ船をうかべ宴を催し殊
更月の夕ハ清光の隈なきを翫ひ酒に對して奇風ひなんと
甚賑しかりしとなり　江戸崔に諸國の大船殊に唐船此川に
風のさゝら芦の葉の　隈なきを尋ぬ京の地なれハ船遊ひの船に波の
笛吹なくしと云く　三又江泛舟
風静又江不起波　輕舟汎々醉中過　春臺
天遊只




四日市

三河万歳江戸ゑ
ありて毎歳極月
末の夜日本橋乃
南詰ゑ集りて
戈毬すえ〳〵ひて
抱ゆるゆり見を
戈毬市と云

在人間外　長嘯高吟雑掉歌

人〳〵ふとゝかゝるゝ八月の十六夜三河ふを
うゝく聞えさゝりしふ弧人ゑ撃鼓るの
年十六なりとゝく

〳〵きくも二八のナゐ夜月とゝの　まさあることのてゐい　ト養

ゝもありゆゝゆもあり川も引ゆ聞ハ引ゆ聞ハ引ゆ聞系　全

江戸橋　日本橋の東よりゝく伊勢町より本材木町へ行間ゑ架ル
南の橋詰巽の角ゑ船宿あり江戸の内諸方への船場あり又
同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の
船ゝふ集ゑ所ふ名とす

四日市　江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市
場とゝの引〳〵村ゆゝくゆゆ〳〵へハ今の繁華のめゝゝゝ
街も市をなゝゝく交易せゝれハ得ゝゝ萬の賈
立る區を名つけて某日市と云羽州のあゝゝゝゐハ二日市と云より
十日市と云廷區の名ふ付き交易せり此地も昔ハ毎月四の日ふ

御料理

中橋

市を立しかなりとそ今も其遺風ふく草物又ハ野菜の類ひ其余乾魚なとの市ありて繁昌の地なり此地に根津権現の御旅所あり正徳年中ゟ造営あるとそ同所河岸ゟ傍く封疆截り下より石を以く畳揚上ゟ家根を覆ふ明暦間板のむさしあ槁の南萬町より四日市迄の町屋を取除け高さ四間ゟ川端より北ゟ東西二町半ゟ土ゟ蔵を畳あけらるると云く今ハ岸島ゟ四日市と

祇園會旅所　南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻ゟあり本社ハ神田明神の地ゟあり祭所素盞嗚尊ゆ一て是を大政所と称せり毎年六月七日ゟ十四日帰輿一なる其間赤詣多く甚あきハへり

鎧の渡　茅場町牧野家の後を云此所より小網町への舟渡を唱へ往古ハ大江なりしとなる里諺ゟ云永禄年間源義家朝臣奥州征伐の時此所より下總國ゟ渡らんとそ時ゟ

鎧之渡

暴風吹發して逆浪天を浸し既に其船覆らんとせし義家朝臣
鎧一領をとりて海中に投じ龍神に手向く風波の難なく
らしめむるを祈請を遂ふはくうなく下總國に着岸あるもし
より此所を鎧ヶ淵と呼へりとなり
牧野侯の庭中に
ありと記せり

兜塚　同所海賊橋の東詰牧野家の庭中ゆゑり源義家朝臣
奥州征伐凱陣のとき先の報賽のため且ハ東夷鎮護のるとし
て日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き
篭めまつりしなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮祭る小祠
あり　紫の一本と云る双葉に甲山とあり藤原秀郷平將門を討
首を曹と共に持添しを曹とハ此地に埋めるとあり

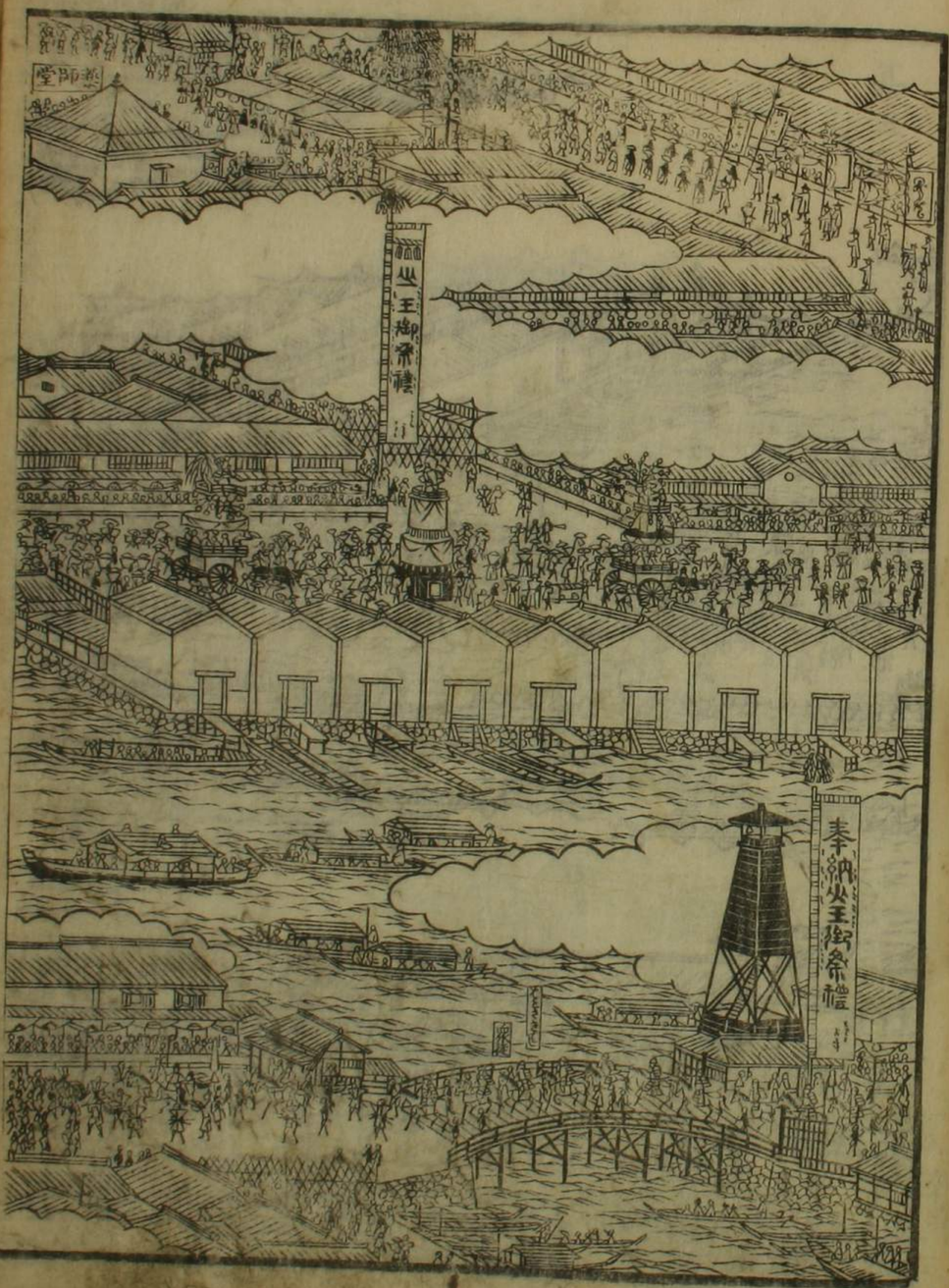
永田馬場　山王社旅所　茅場町にあり遥拝の社二宇並び建て
寛永年間此地を山王の社旅所に定らるとのこと
（一宇ハ別當觀理院持ち　一宇ハ神主樹下氏持ち）
隔年六月十五日御祭礼ゆく永田馬場の御本社より

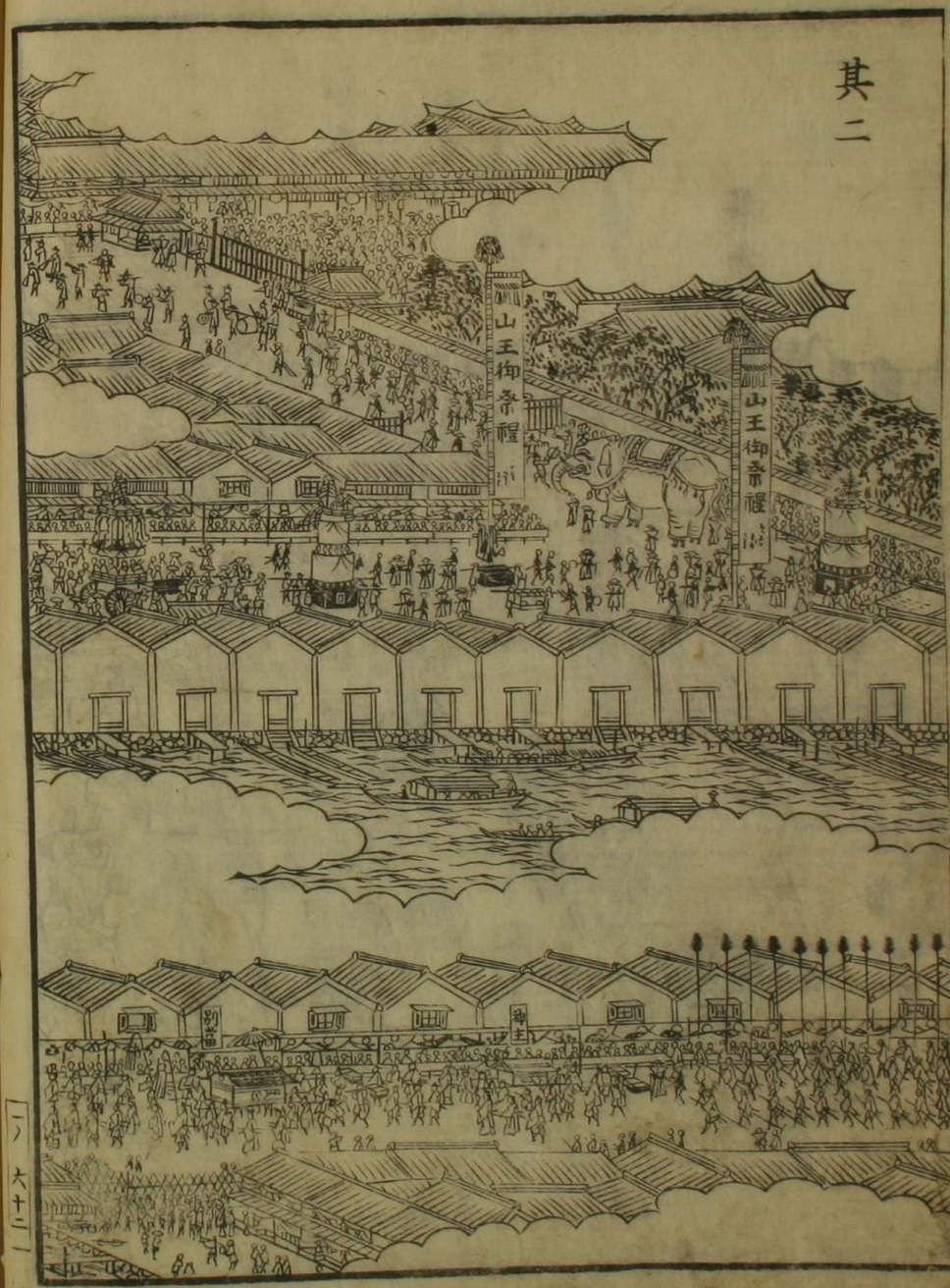
神輿三基此所より神幸あり假に神殿を儲け供御を献備へ
別當ハ法樂を捧け神主も奉幣の式を行ひ夜に入て帰輿
なり其行装榊大幣菅蓋錦蓋雲の如く社司社僧ハ騎馬に
跨り或ハ輿に乗り前後に扈從を諸侯よりハ神馬長柄鎗
を出されて途中の供奉厳重なり又氏子の町々よりハ思ひ思ひに
練物あるひハ花屋臺車樂を飾る錦爛純子抔のまん幕を打
各々出立花やかに羅綾の袂錦繡の裔を飾りて粧ひ
巍々堂々として善美を尽せり　此日　官府の使沙汰として
神輿通行の道筋ハ横の小路々ハ矢来を結ひ往来を禁せらるる実に大江戸第一の大祀ゆゑ一時の壮観なり

藥師堂　同く御旅所の地にあり本尊藥師如来ハ恵心僧都の
作なり　山王權現の本地佛にして慈眼大師勧請なり
毎年八日十二日（正五九月廿日御帳あり）ゆゑに門前二三町の間植木の

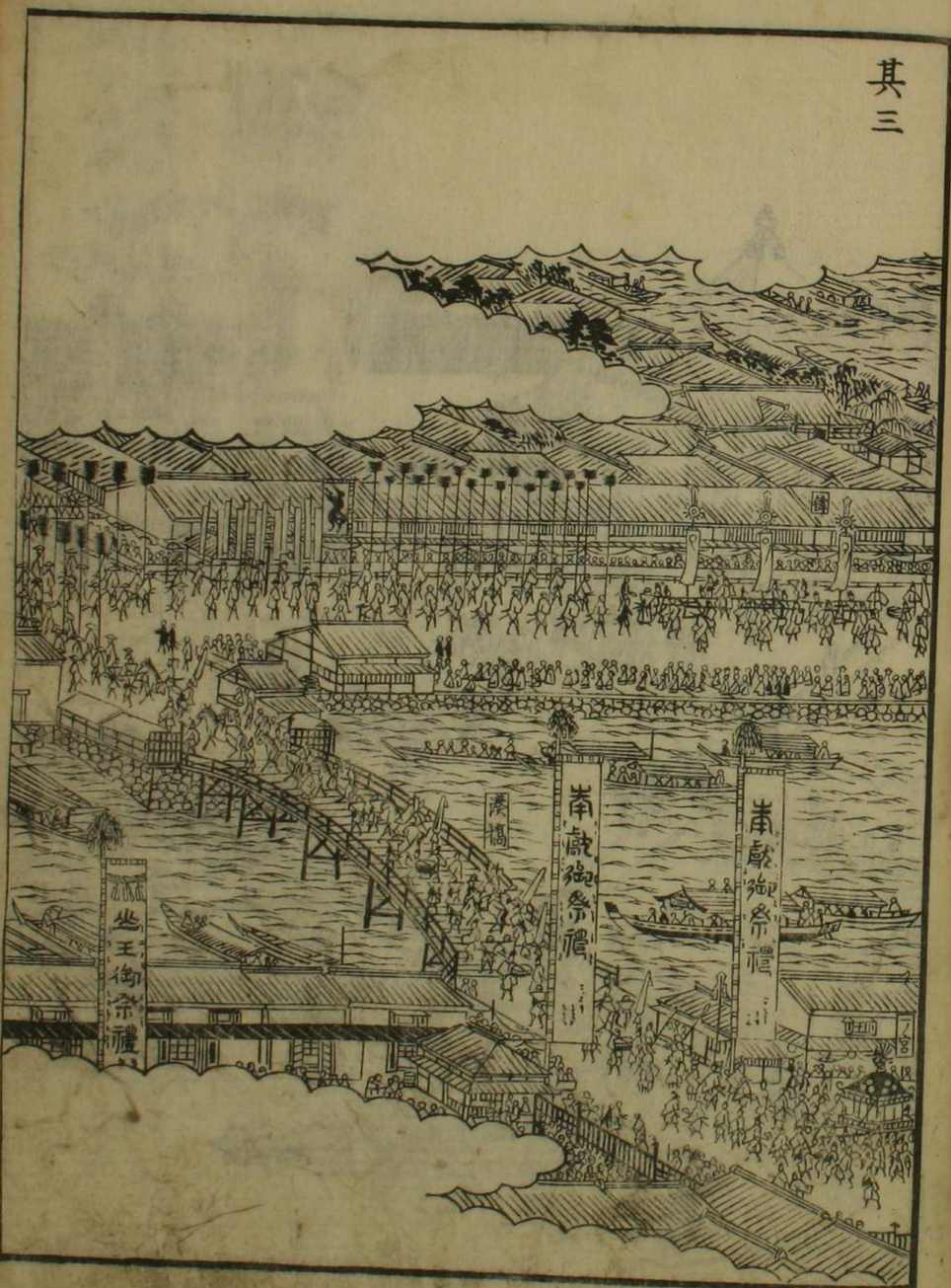
六月吉日
山王祭

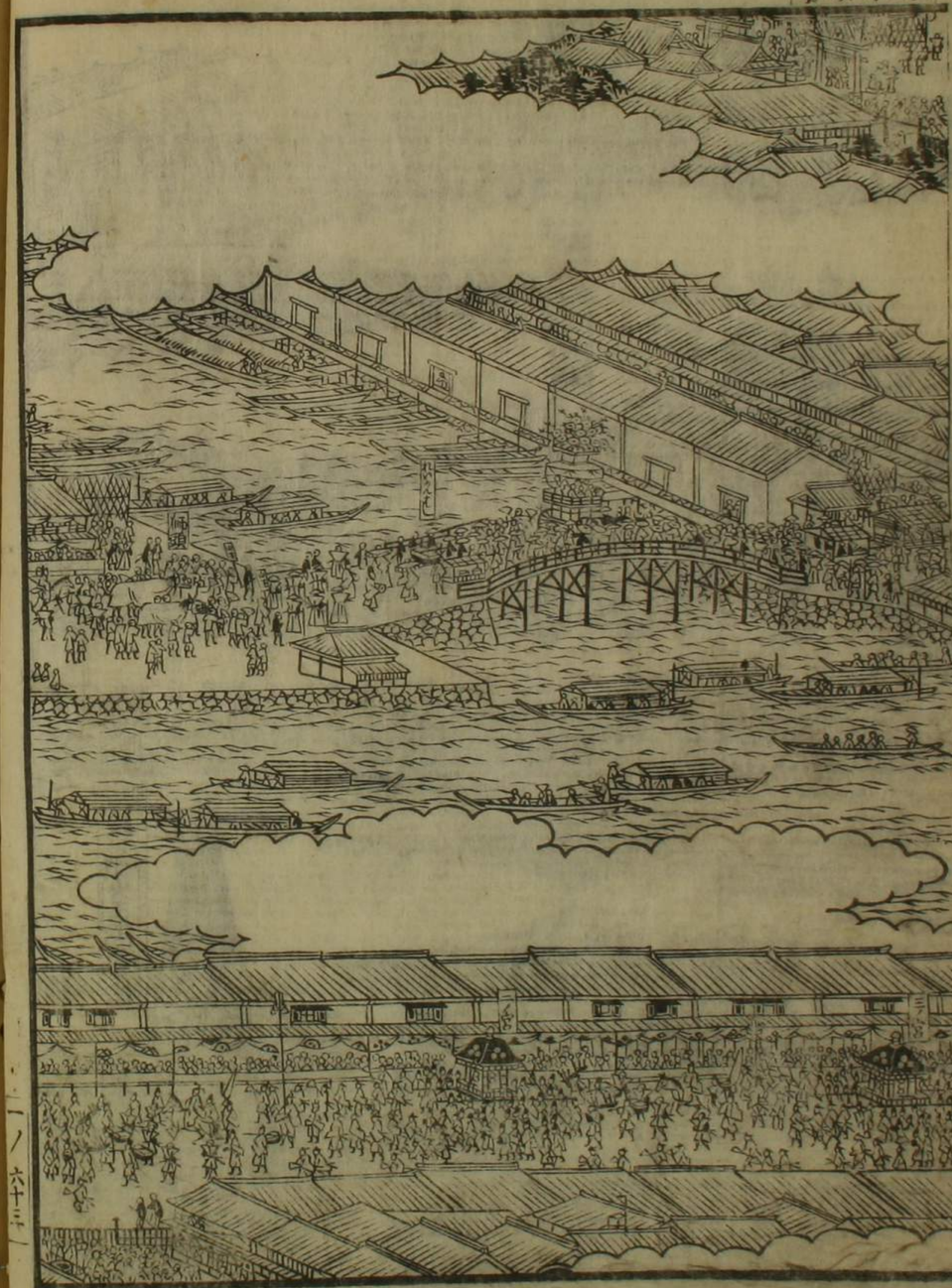
京ホ
天下
まつりや
古車
其角

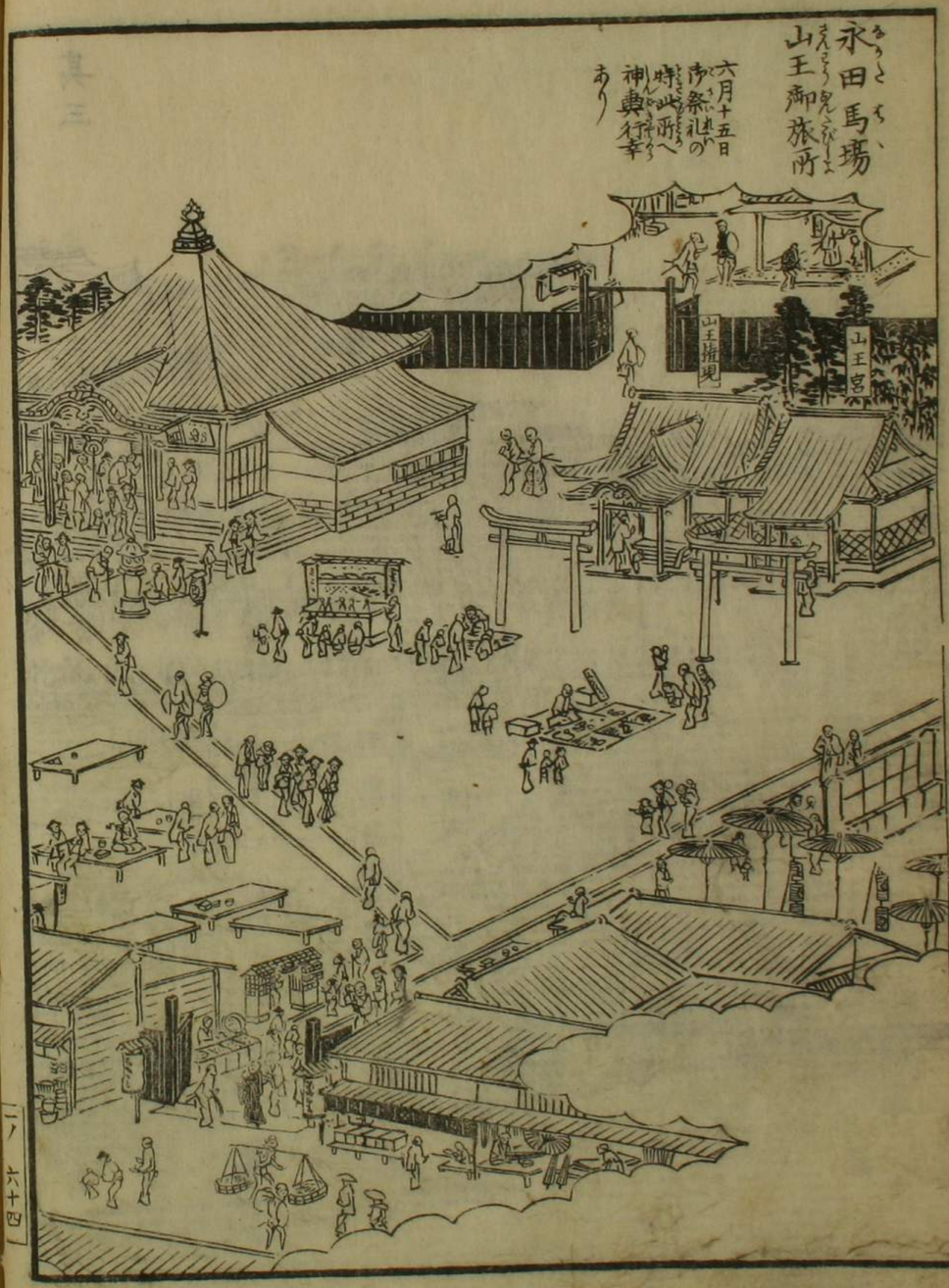

山王御祭禮
奉納山王御祭禮


其二
山王御祭禮
山王御祭禮

其三






永田馬場
山王御旅所
六月十五日
市祭礼の
時此所へ
神輿行幸
あり
山王宮
山王指現

教場町
藥師堂
りきい
地蔵
修行者
世尊堂

毎月八日十二日
薬師の縁日ハ
植木ど商ふの
彩しく来る
群集して
賑えり

夕やく
まくしき
風の
塩
うの
真角

市立て別當ハ醫王山智泉院と号す（元ハ鑑島山と号し）本尊縁起曰
恵心僧都ハ其父母大和國高尾寺の某師佛ゟ禱く設くる
所の靈兒なり僧都佛門ゟ入る後法恩を謝せん為自ら此本
尊を彫刻あり高尾寺ゟ安置せしふ遥の後相州大場
村ゟ遷し来りしを然ゟ慈眼大師東叡山ゟ来る此地や
大城の東ゟ位し来りも山王此本地佛ゟ来りしふ安置奉り
来りしとなり

天満宮　同境内ゟ社司諸井氏奉祀す　二月八月共ゟ廿五日を祭日とせり　神像ハ画
（幅中一尺寛永年間柿宮ゟ奉仕の春日局　大樹より拝受せしれしを山王の
神主日吉右京進へ附与あり後諸井氏請得て勧請ゟ）

類　柑子　北の窓

我栖北隣ゟ芦荻茂く笹河なる地あり茅場町と
名ふ四れく背ハ海辺なりしを今ハ茅場町しく
なり橋所の侍橋本と宮ゟ師佛立て堂のかゝ中

たゝ深の流ふ終ふかゝ池あり
深ゟ人しゝ流れハ蓼の穂ゟ立のし来りし第木
きつゝ行る風ふつけ玉の茅ゝ大てゝ北
京ふなゝ移ふかなゝ生ふ月ゝ所とゝ中畧
りゝ弗れ美ふ這知く巷かゝもそゝ
なゝ娘のにつゝ来ゝ有るあゝ行くぬとゝくゝん
とゝ有やゝ来ゝ来ゝ来ゝ来ゝ
毋ゝ来ゝ来ゝ来ゝ　下畧

俳仙宝晋斎其角翁宿　茅場町　某師堂の辺地ゝ行元禄の
末ゝ住す即終焉の地なり
（按ゝ梅ゝ句ハ其角翁の中普く人口ふ
勝ゝ依て干可否ハ茅ゝ生ハ茅ゝ居宅の間近ゝ助し）
徂徠先生居宅地　同所植木店なり先生一号を護園と称れし

伊雜大神宮

奉獻御玉串

奉獻御玉串

鶏本

勸進聖判職人尽
歌合の内花と獅子舞

たとへあれく
まこの
ちりけ
まん
獅子の
たくく
鼓ふ
ちも
ぼまん

道遙院

平田屋

護ハ萱と同し字義なとハ称せられしありよりこの地ハ住せられしかと知るし

伊雑太神宮　北八町堀松屋橋より一町ばかり艮の方塗師町代地町屋の間にあるを　當社あるを横町と呼へり此所を字土俗磯辺太神宮と云ふ

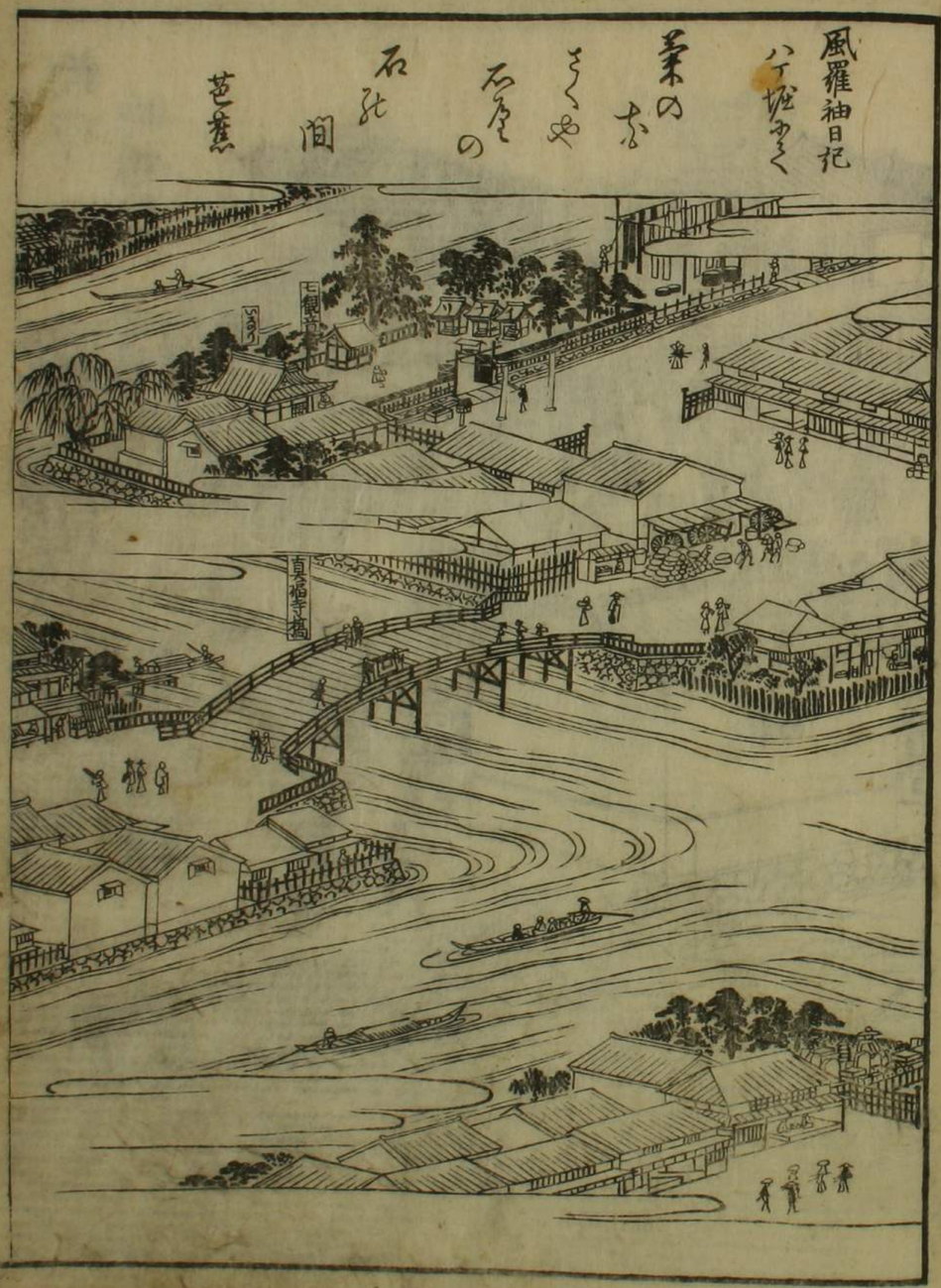
伊雑の御神ハ天照皇太神宮の別宮ゆゑに祭神ハ伊佐波登美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口市正某伊雑宮より移し奉る通三丁目に宮社を営み今神明長屋と唱へハ則是なり　同十年癸酉今の地へ移しまるるとなり例祭を六月廿六日に修行せり

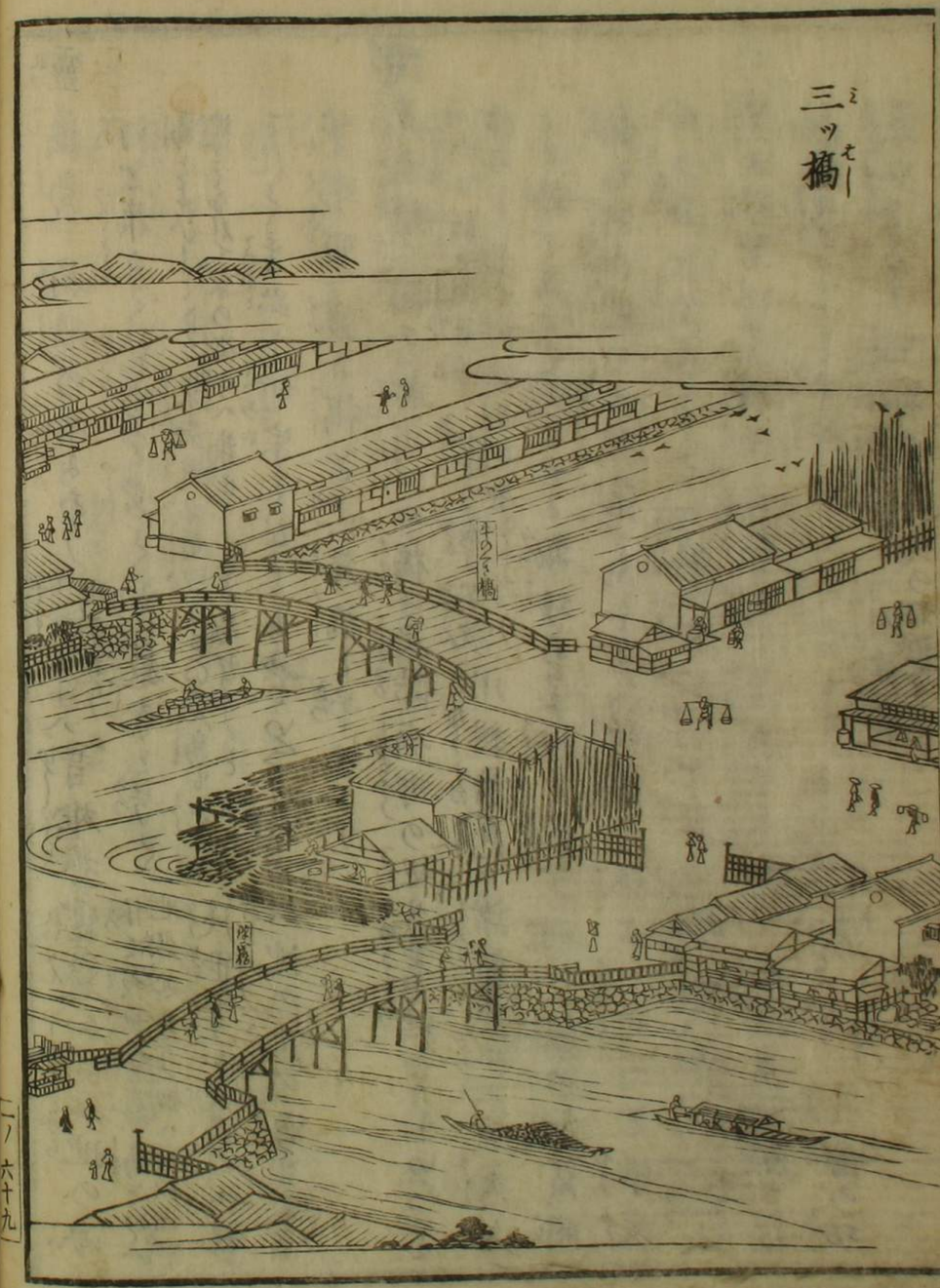
三ツ橋　一ツ所に橋を三所架せり　左ふ右ふ呼ふ　北八町堀より本材木町八丁目へ渡るを彈正橋と呼ひ　寛永の頃今の松屋町の角に島田本彈正少弼やしきありしに因なむ　本材木町より白魚屋鋪へ渡るを牛の草橋と云ふ　又白魚屋敷より南八町堀へ架するを真福寺橋と号くなり

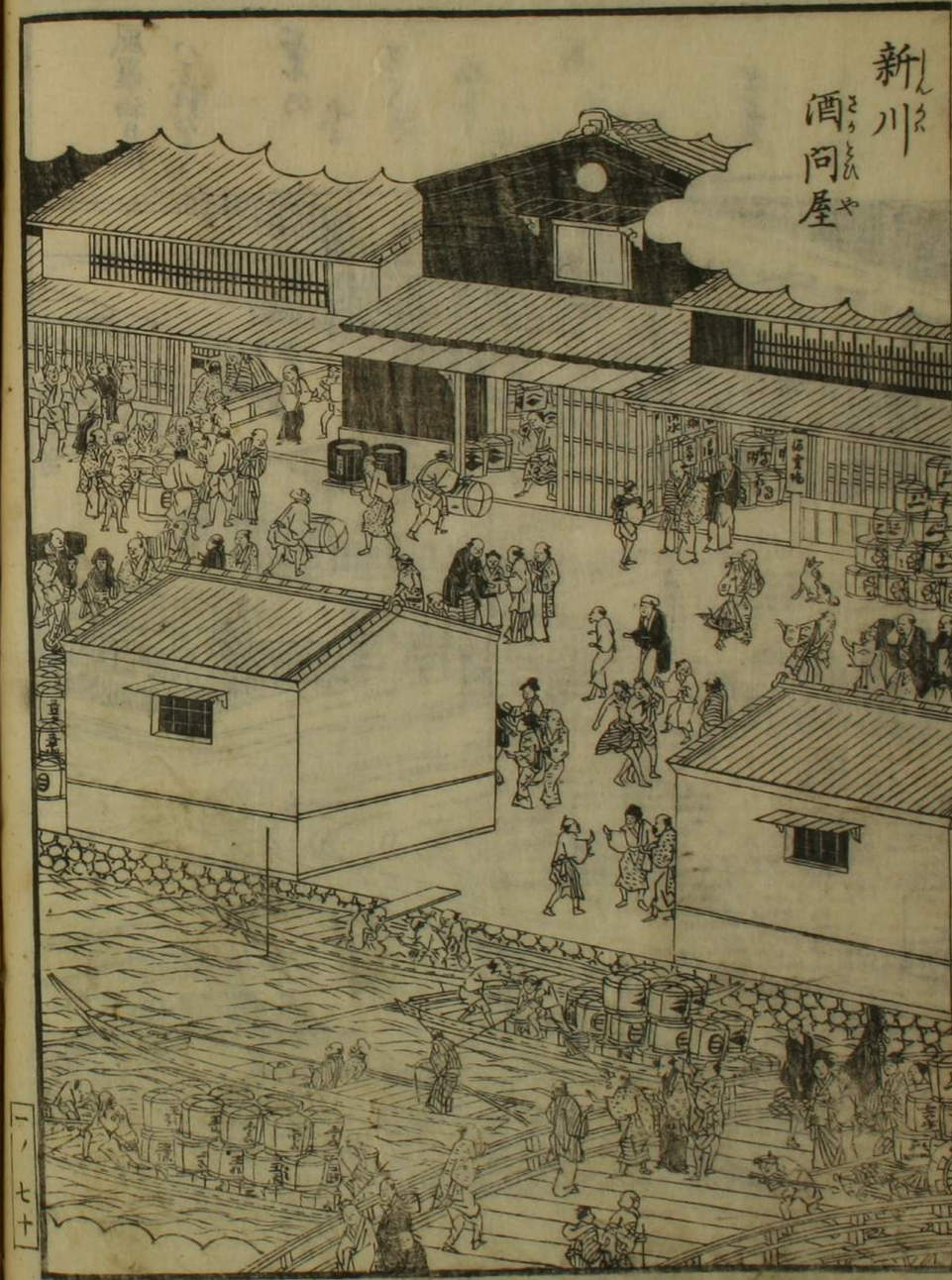
霊巌島　箱崎の南にあり　町数今十八町半あり　昔雄誉霊巌和尚此地の海汀を築立て梵宮を営む霊巌寺と号く　島とよひしとなり東海道名所記に島なりと云云　地となれて東の海中へ築出しなり　江戸の中浅世寺を深川へ移されしを跡を町家となしたるを故に此地の北の通りより茅場町へ渡る橋を霊岸橋と号けり

隨見屋鋪　同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありと云ふ　此所に瀬戸物屋多く住せり　左に茶碗鉢店とも弱く或隨見長屋ともよへり　川村隨見ハ諸國の水土を考へるふ精しく大に世に勲功ある海を築き川を堀田畑に開発を河内國の水を落さんとして摂泉の堺に大和川を堀淀川の溢を治んとして大坂に安治川を鑿　隨見自らの実名を安治と云ふ音に呼ぶ安治川と云ふ　其土砂を以て川下に新に山を築き洪水の時高波を防除うるを最少くす　岡沽涼云く川村隨見ハ本名ハ波除山と云ふ　其餘の功

幕下川村氏の始祖なりと云


風羅袖日記
八ケ堀あたく
業の
おく
さくら
石ゝの
石社
間
芭蕉
百石橋


三ツ橋


新川
酒問屋

芭蕉
拝殿

新川
大神宮
牛頭天王
八百万神
富士
天神
三峯
弁天

伊勢太神宮　同所四日市町よりあり　此地の産土神とも（此所を俗間に新川と唱へ間屋多く繁昌の地なり）伊勢内外両皇太神宮を勧請し奉り遥拝所とも迂宮伊勢と同年なり（江戸鹿子よりハ寛永中草創とあり）伊勢内宮の社僧慶光院比丘尼江戸泰府の折柄旅亭の儀の為より此地をゆゑとて（慶光院伊勢上人ハ格式御門跡並ふ比せられ紫衣を賜ふ）（末印地なり）始祖の比丘尼ハ内宮建立の時より連綿と社僧より依る内宮の嗣（山本大夫ハ始祖慶光院の子孫なるなり）今も彼寺の住持比丘尼ハ代々この家より

（按ふ明暦の江戸繁盛より今所謂三の丸の地ハ伊勢上人の屋鋪とせられ西ありこの上人の旅宿なりしを迂されしなり）

年山紀聞云

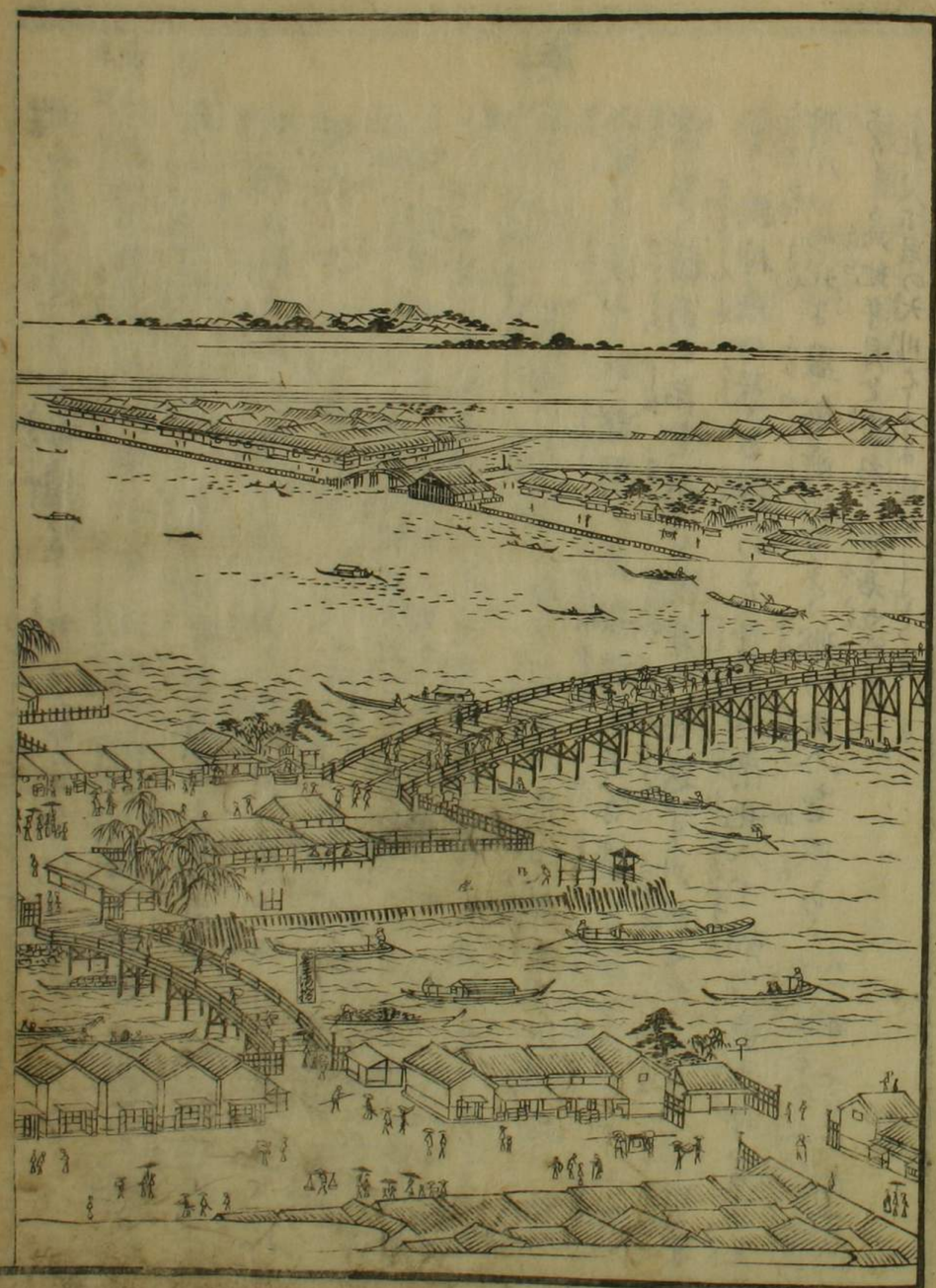
永禄元年日記（記者不詳）後六月三日中山亜相（神官伺奏）彼談云去月廿三日神官（訓）上棟母屋ニ令沙汰ニ或比丘尼号ニ上人（先皇市代ニ女房初例称上人名ニ号）慶光院以ニ諸国勧進ニ力ニ此上棟取り立ニ者ニ内ニ又内宮ニ上棟存立ト云云難不相意ニ（未世ニ此ニ伊勢神恩有ニ子細ニ不測ニ）

永代橋　箱崎より深川佐賀町より掛る元禄十一年戊寅始て是を架せられる永代島より架せ名とす長凡百十間餘あり此橋の深川の大渡船諸國への廻船輻湊の要津なり橋上ハ高く東南ハ蒼海ゆく房総の翠壁斜より開き美

落の白峯ハ大城の西より峙ち荒波の遠嶺ハ墨水より臨むて朦朧たる白嶺金龍の宝閣ハ緑樹の蔭より見えかくれて自丹青を施せるよ似て風光さらに画中よりあるごとし

藥師堂　霊巌島銀町よりあり別當ハ真言宗ゆゑ医王山圓覚寺と号す本尊ハ三州鳳来寺峯の薬師と同木同作ゆゑ（理趣仙人刻ル座像丈三尺ありと称ス又ハ橋本薬師ともいフ）鳳来寺薬師此霊大宝年間より造立ありしなり像ハ高野山橋本の里より慶長年間當寺の所基恵生阿闍梨此地より迂しなり（彼寺始ハ深川霊巌寺の境内ふ安置ス）後霊巌寺の境内ふ安置ス（此地よりあり）萬治の後霊巌寺深川ふうつる頃此薬師堂と稲荷の社のみ此地より残しなり

橋本稲荷社　同境内より此所の鎮守ゆゑ社記云神像ハ弘法大師の作ゆゑ（此丈一尺二寸あり）山城國伏見稲荷明神と同木同作なりと往古高野山の麓橋本の里より宮居を造ゆゑ安置あり



永代橋

東望天邊海氣高
三叉口上接滔々
布帆一片懸秋色
欲破長風萬里濤

南郭

故あり〻て後こゝに勸請なし奉るとなり

惠比須前稲荷祠　同所東湊町の南高橋の北詰人家社間に

あり　別當ハ天台宗ゆゑ　昔ハ向井戸の〻きふあるゆゑ海賊橋あり

普門院と号す　引移られし頃宮居を構の外ゑ出されしゆゑ此所を名ひすれ

宮前又ハ蛭子前と唱へ　古老云く昔此地より鉄炮洲築地へ

出洲の〻あり此辺の洲ゑ芝海老とつくるもの多く集る漁人字ゑえひの洲

と唱へ其洲崎ゑあり稲荷の宮とのゑひの洲

蛭子神ゑ混し又夷子ゑ祀しいふ附會せしありとそこの

後世誤なるもあり

湊稲荷社　高橋の南詰ゑあり　鎮座の来由詳ならず此地ハ廻船

入津の湊ゆゑ諸國の商船普くこゝに運ひ礎を下しそ此社の

前ゑ置く積所の品を悉く問屋へ運送す此故ゑ近世吉田家

より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又

此川口の北ゑ監船所あり〻く船の出入を改らる

事跡合考云此祠昔ハ

あり〻此地年月を重ねく家居立つるそ

八丁堀一丁目の南岸ゑ

それハ八丁目の大川ゑ迄せしとそ

本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取くなるつき

旨　台命ゑよりく毎年十一月より三月迄怠らす其

間ハ他の猟を堅く禁ゆゑへ猶ゑ後深川八幡宮の前ゑく

空地三千坪をあつく佃町と号けらる浦菜魚をもなるる

ゑとなれる　或人の説ゑ此所ハ始安藤右京進ゆゑきの地ゆゑく住吉の社

貢ゑ佃島ハ紀州賀多の漁人雑居し頭ゑ繁茂の藤ハ安藤家ゆく栽るゆゑ

一島皆本願寺宗ゆく他宗なし　此地ハ殊更白魚ゑ名あり故ゑ

と云く

冬月の間毎夜漁舟ゑ篝火を焼四手網を以く是を漁り都

下坪ゑく是を賞せり春ゑ至る二月の末ゑり八川上ゑ登る

弥生の頃子を産も其子秋ゑ至る七八月の頃江海ゑ入と云

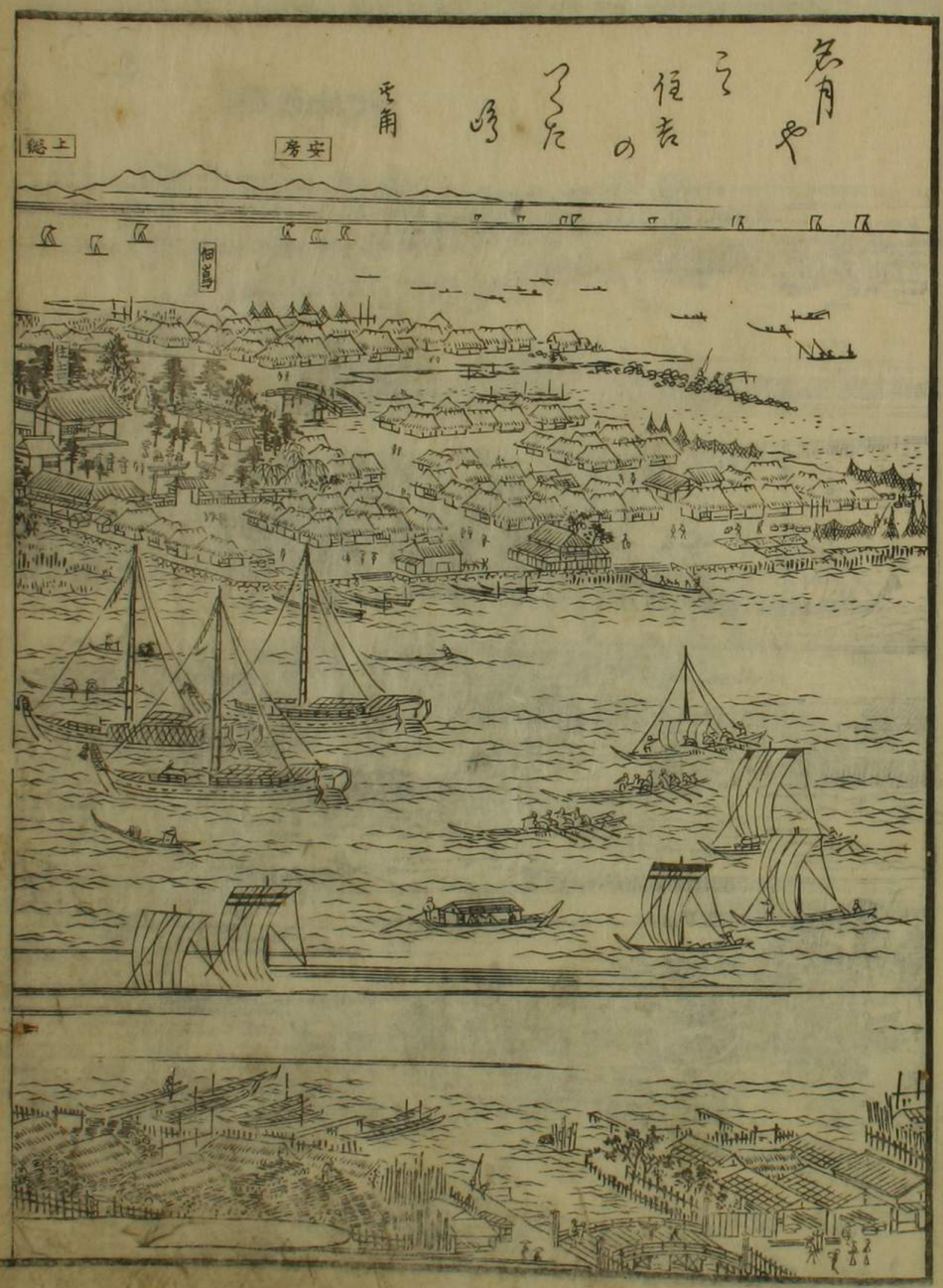
事跡合考ゑ云両國の川筋ゑ産

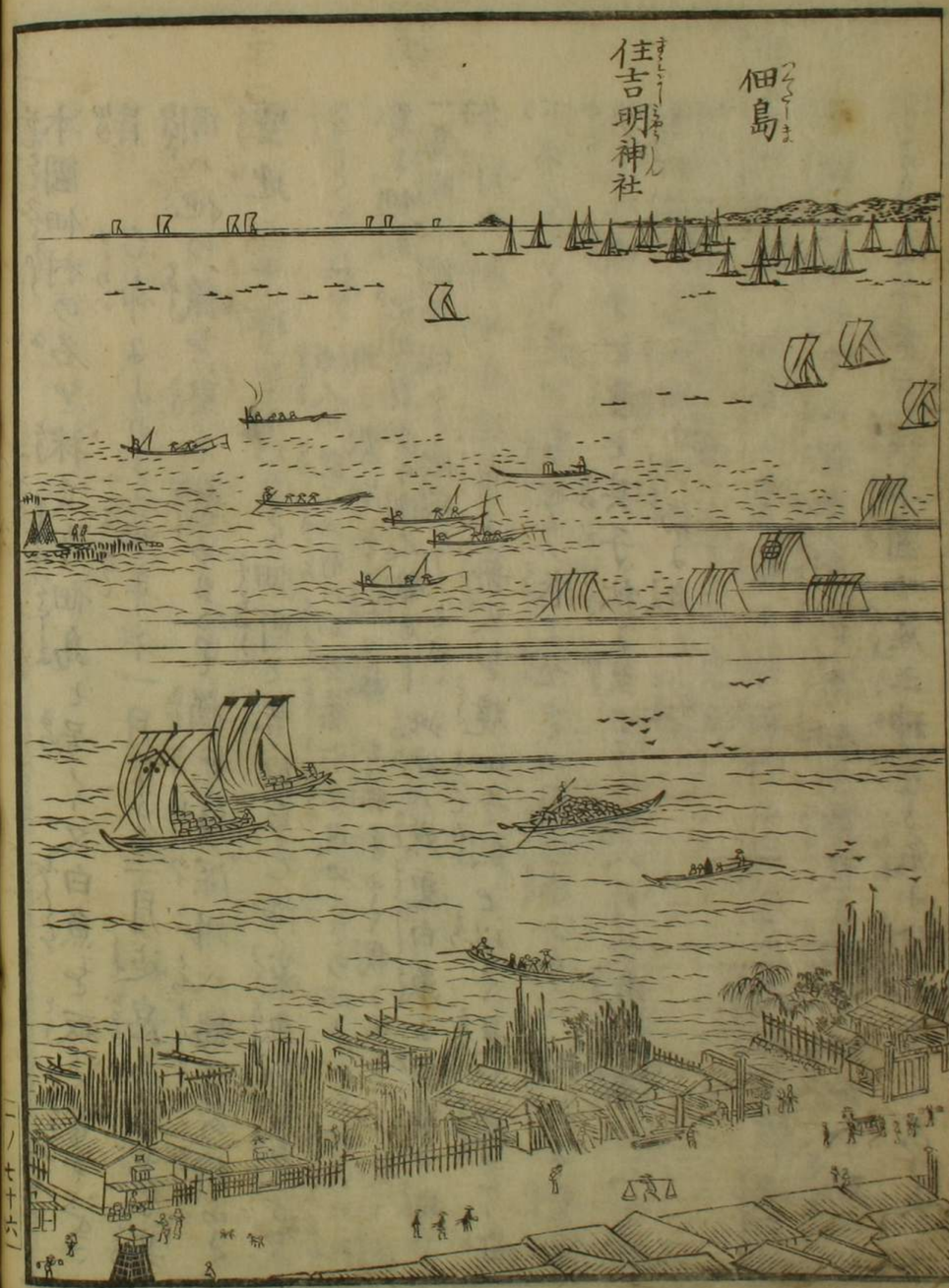
白魚ハ尾州名古屋の浦ゑりとゆゑ

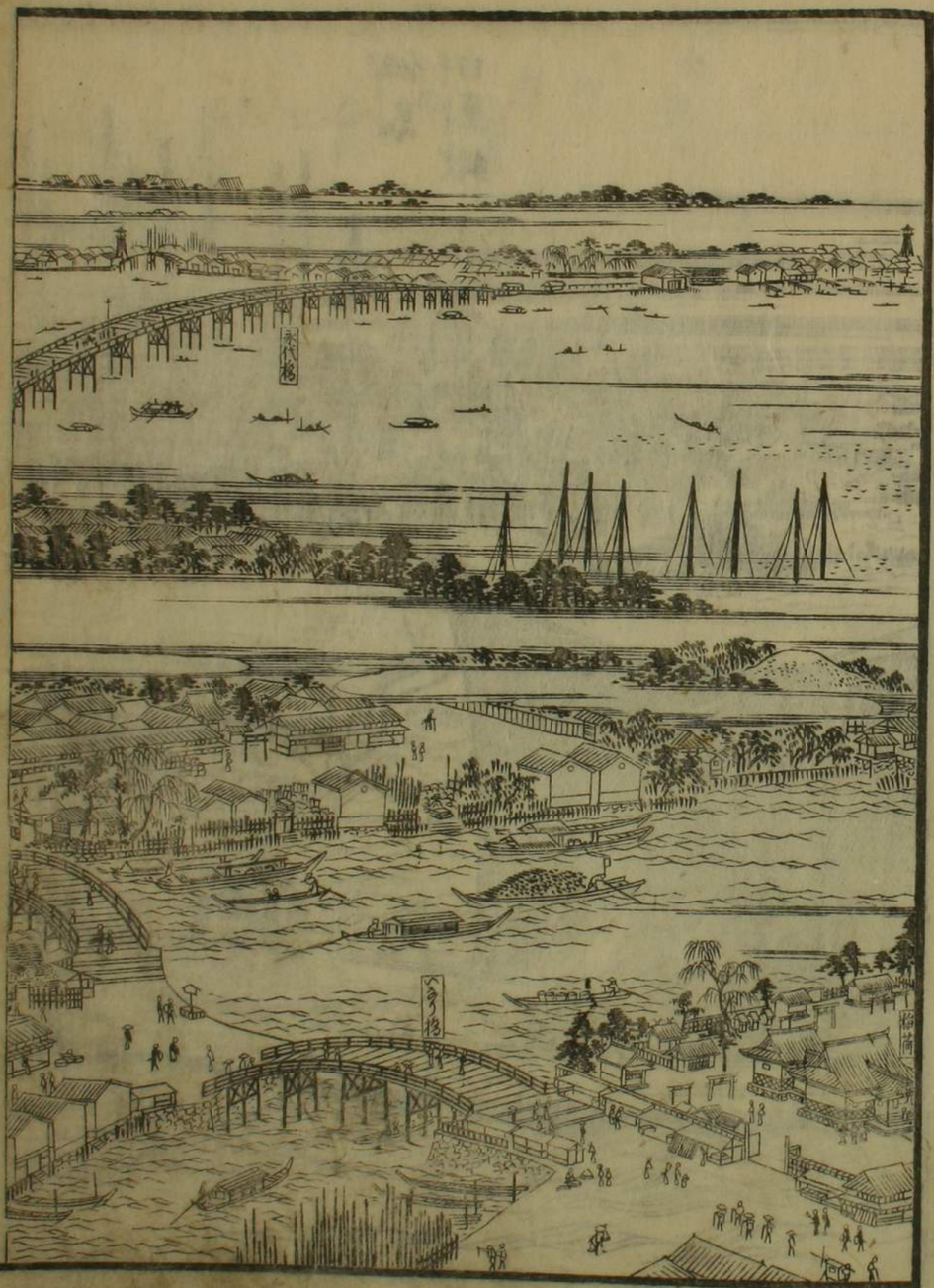
住吉明神社　佃島ゑあり祭る神摂州の住吉の御神ゑ同し神主ハ

平岡氏奉祀も正保年間摂州佃の漁民ゑ初く此地を賜り

しゆゑこゝ移り住本國の産土神なるゆゑ分社しくこゝ

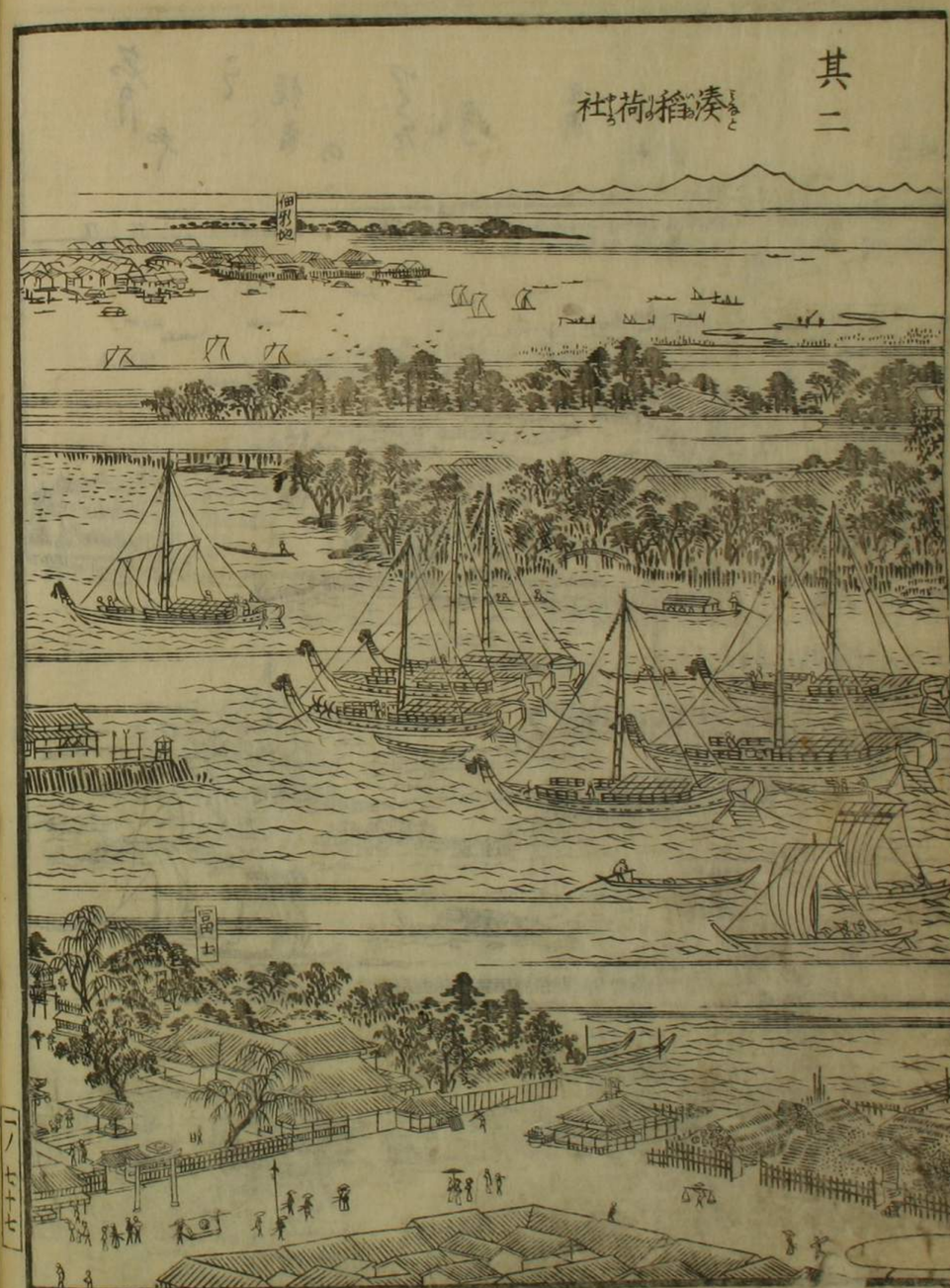

上総
安房
伊豆島


佃島
住吉明神社



其二

湊稲荷社



佃島
白魚網

白魚
價
あるなり
出
れ
義

住吉の宮居を建立せしとなり　摂州の佃村ハ西成郡にあり古今集にも
住吉明神の宮居あり　神功皇后三韓伝代の凱陣の時平地に浮船の艫綱を
けるひしより己降佃村の地に浮船の鬼板を埋へいにき　祭ハ毎歳六月廿八日廿九日
此分社　当社ハ毎歳六月晦日名越祓修行あり　両日なり人々群集す
逍遥院実隆公住吉に納和歌十首の題を詠てなり一中に

江上月

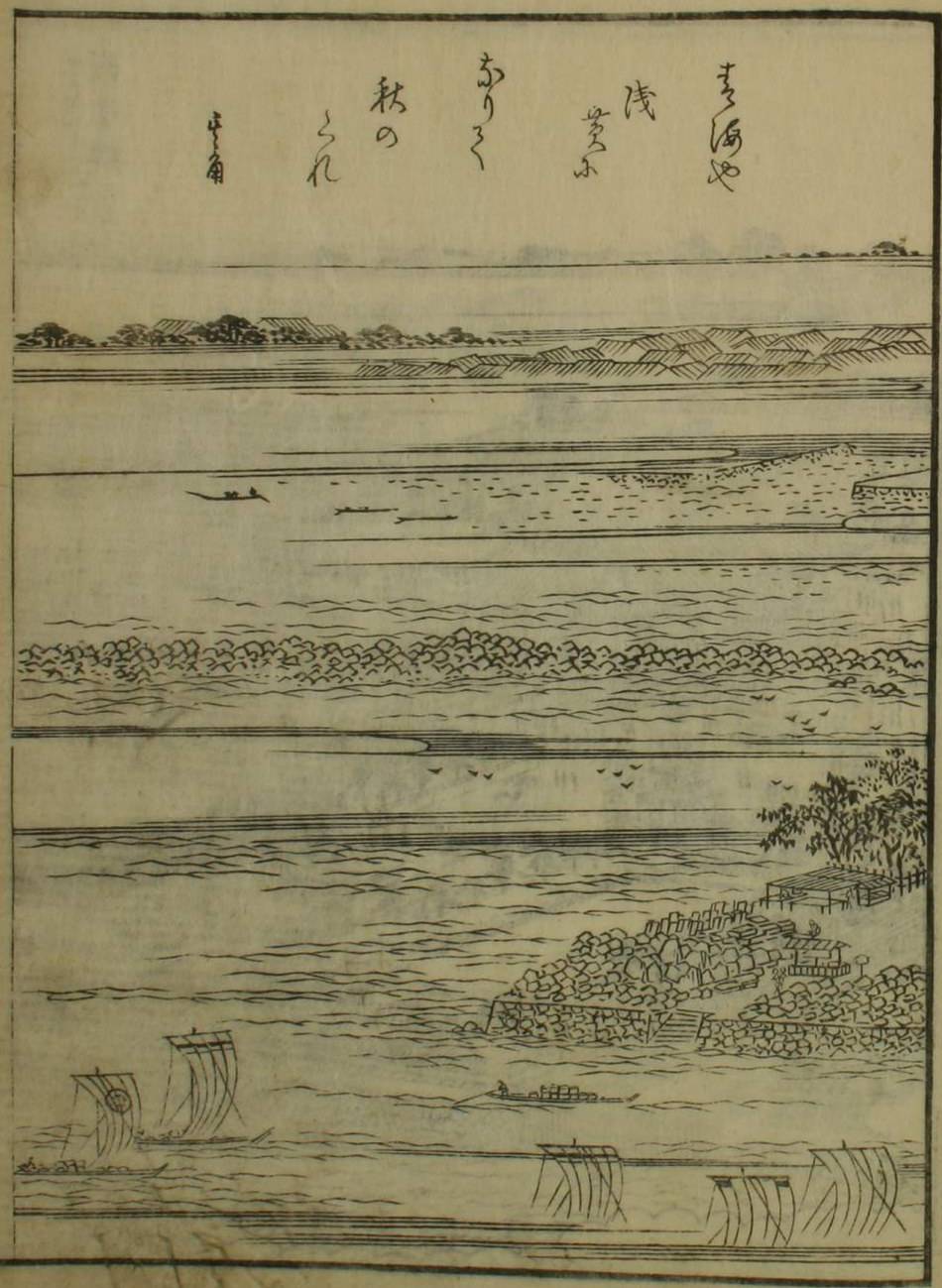
此浦の入江に月のみ澄れてありとく紫こゝむ　富茂睛

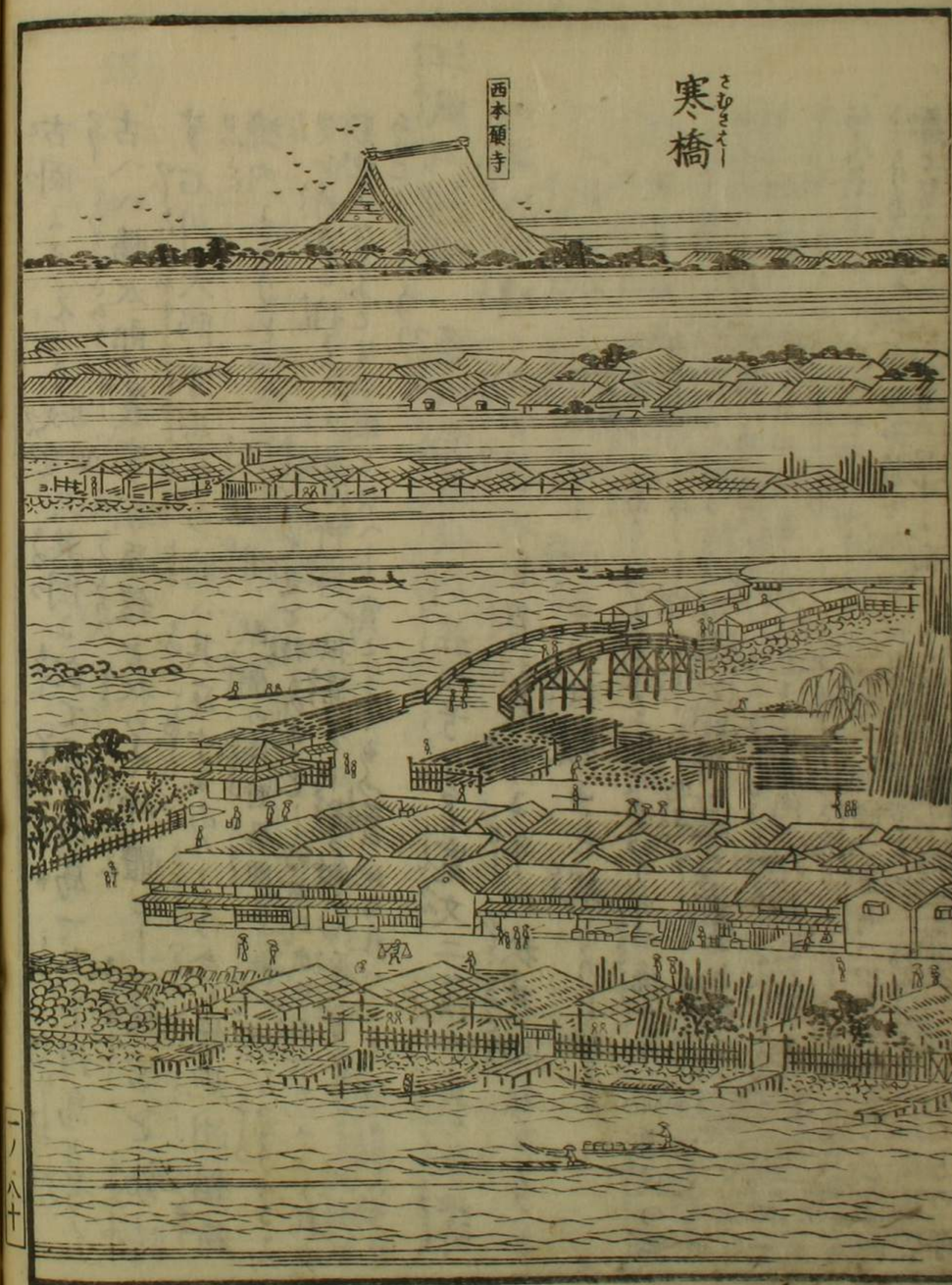
名月やこゝ住吉に比くたしゝ　其角

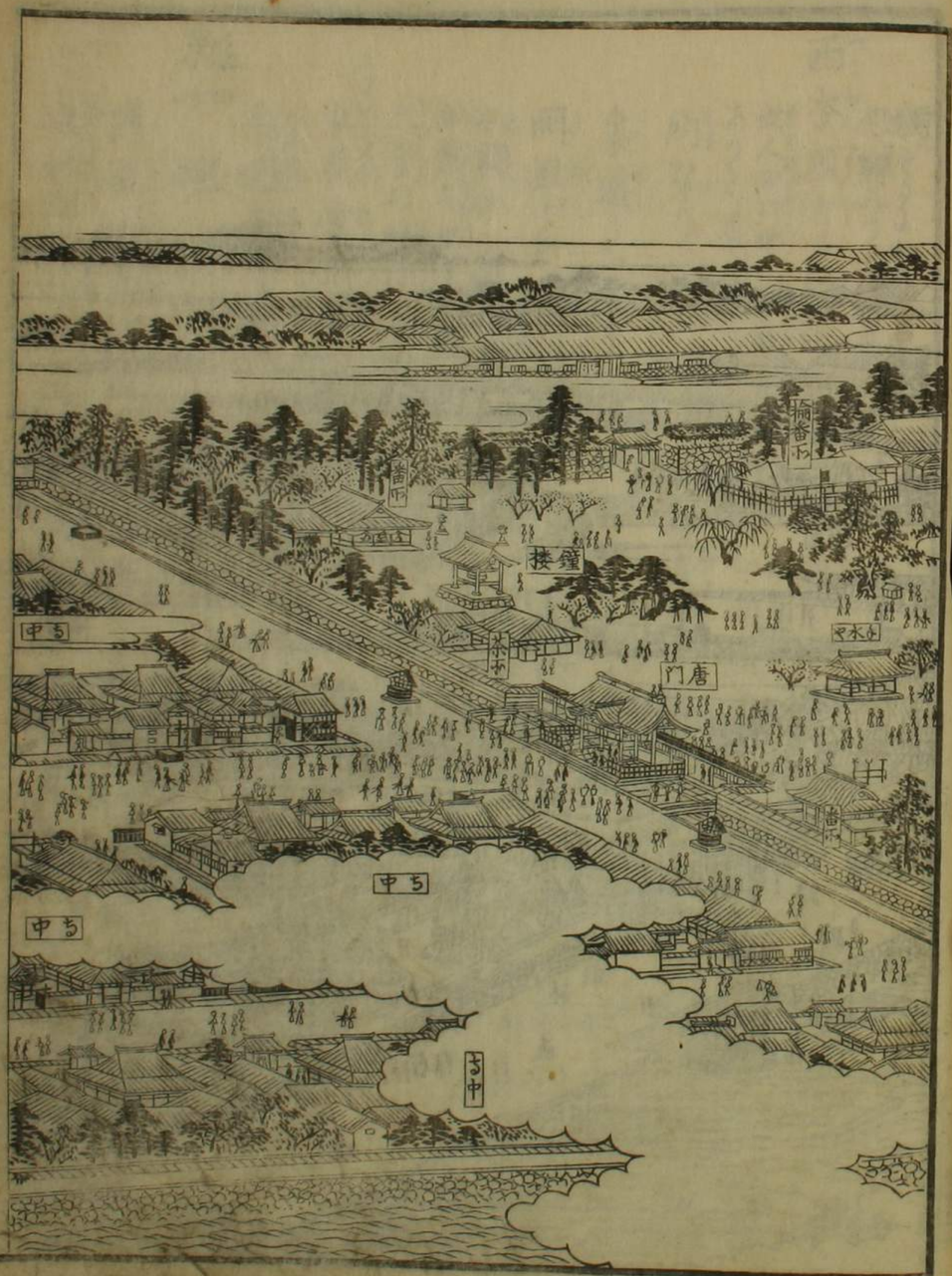
此地ハ都下を去る咫尺なれとも離島にして漁人の住家の
所得顔なり　弥生の潮乾て貴賤袖を交へて浦風に醉を醒し
貝拾ひあるきて磯菜摘るゝと其與殊に多し　月平沙を照して
漁火白く芦辺の水雞波間の千鳥も共に此地の景色に入りて四
時の風光足もとに生ずるなり

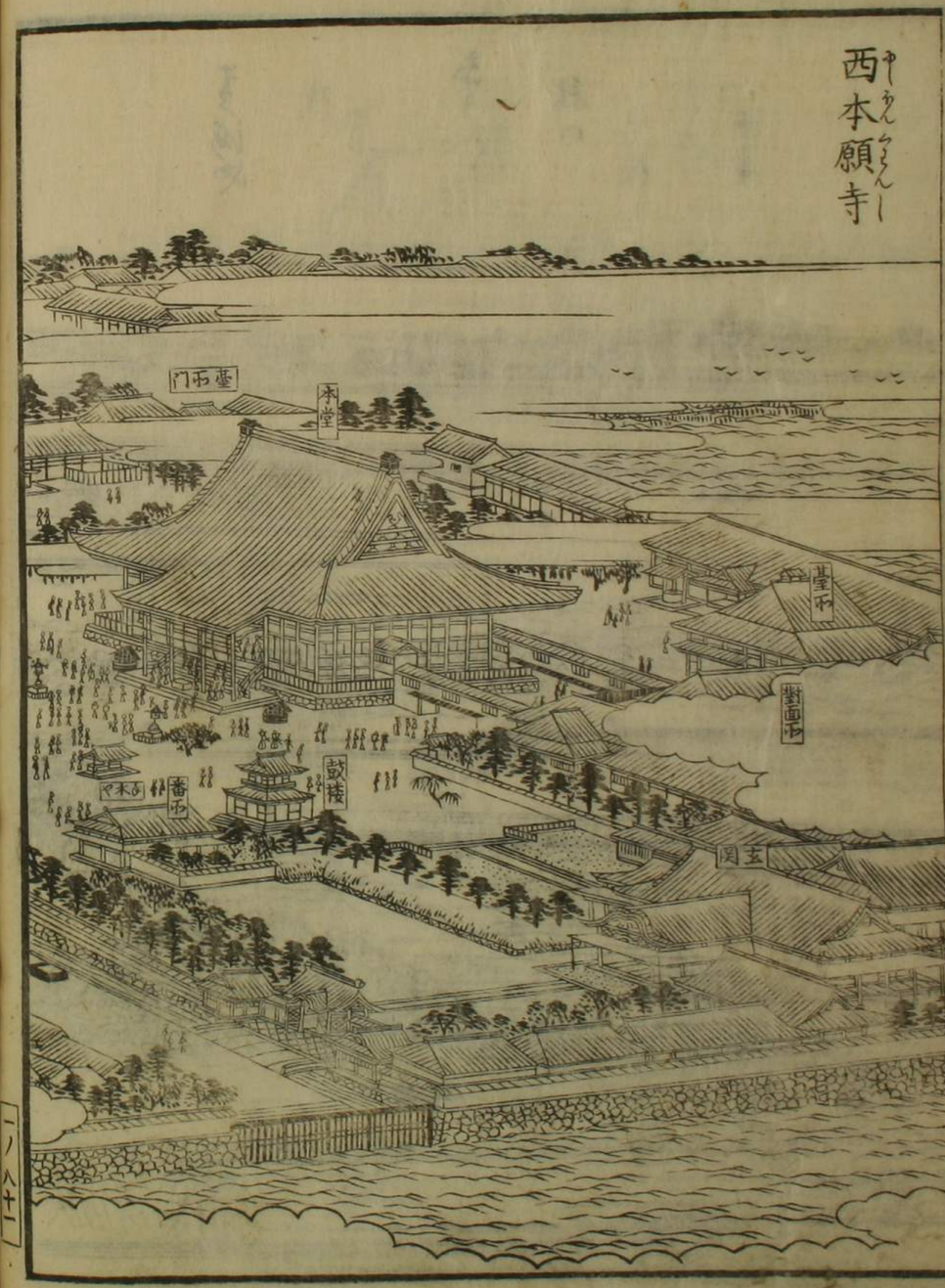
鎧島　佃島の北に並へる今石川島と号　俗に八右衛門島とも昔
鮮領に唱へる寛政四年石川氏大猷公の御時石川氏の先代此島を
永田町へ屋敷替ありしより炭置場人足寄場ふかの舊名を森島と云
江戸の

古図に記て云く此島一名を鎧島と号く　文亀古図又其図に
古へハ幡太郎義家朝臣鎧を収めて神體とし八幡宮を勧請
す石川大隅守居住の時ハ其庭中にありしを今ハ鋏炮洲稲荷
境内にありと云云　或人云昔献廟の御時異國より鎧一領を献りしを
是を片ほに持て大樹の御前へ披露なし感賞のあり此地を
宅地にたまはりなり鎧を携へし賞とし給ひしの地なれハとて鎧島と号け
江風山月楼　築地稲葉侯別荘の号なり寛文二年壬寅の春此所
の海汀を填て土を積石を畳むて翌る年の秋其功なりと
いふ風光他に勝れ殊に洞庭の秋影ゆゑ越こゝとなり
咬逆者嫗　同藩中にありいつもさ二尺ばかりの石像なり稲葉侯の始
祖小田原にありし時辺を巡見せられしとある深山に
一の草庵に一人の老僧の住るあり号を髪かり故に後一度城に入来て城主に見せんと
受るに不の種ハ家臣田崎某に許に置て出去終に行方を知ずとなり住る
所の庵に件の石像を残しておきしを後此地に捨置しとなり
何人なるを知ずとそ伝云此者嫗の石像を一雙並へ置時ハかゝるを者の石像倒
置となり又者の石像ハ口中に疱あるとの寄願し嫗の石像ハ咬とを稲葉侯累代の牌堂に迁し嫗の石像ハ稲荷社の御


まつ海や
浅
笑ふ
ふりく
秋の
くれ
半角


寒橋
西本願寺


鐘楼
唐門
中ち
中ち
中ち
中ち


西本願寺
本堂
鼓楼
玄関

願寺霊験ありといふ

西本願寺　同所川を隔て北の方より俗に築地の門跡といふ

或人云此地ハ明暦四年の仰つけ一向汎々京都西六條より輪番あり〻〻樂所なりといふ

所なり宗派のことの題を塔頭五十七宇あり始横山町二丁目の南側

裏通りふのもとを明暦大火の後此地に移さる准如上人を當寺の開祖江戸名所記に神祖所在世の時京都西本願寺の末寺を立られ宗流を汲華を觀らるゝと云く白石先生云く善養寺とゝ一向僧東本願寺の建立を公へ願ひて立るゝ和漢年契に延宝八年庚申西本願寺立とあり

太子の影像〻〻泉州堺の信證院より〻〻毎年七月七日

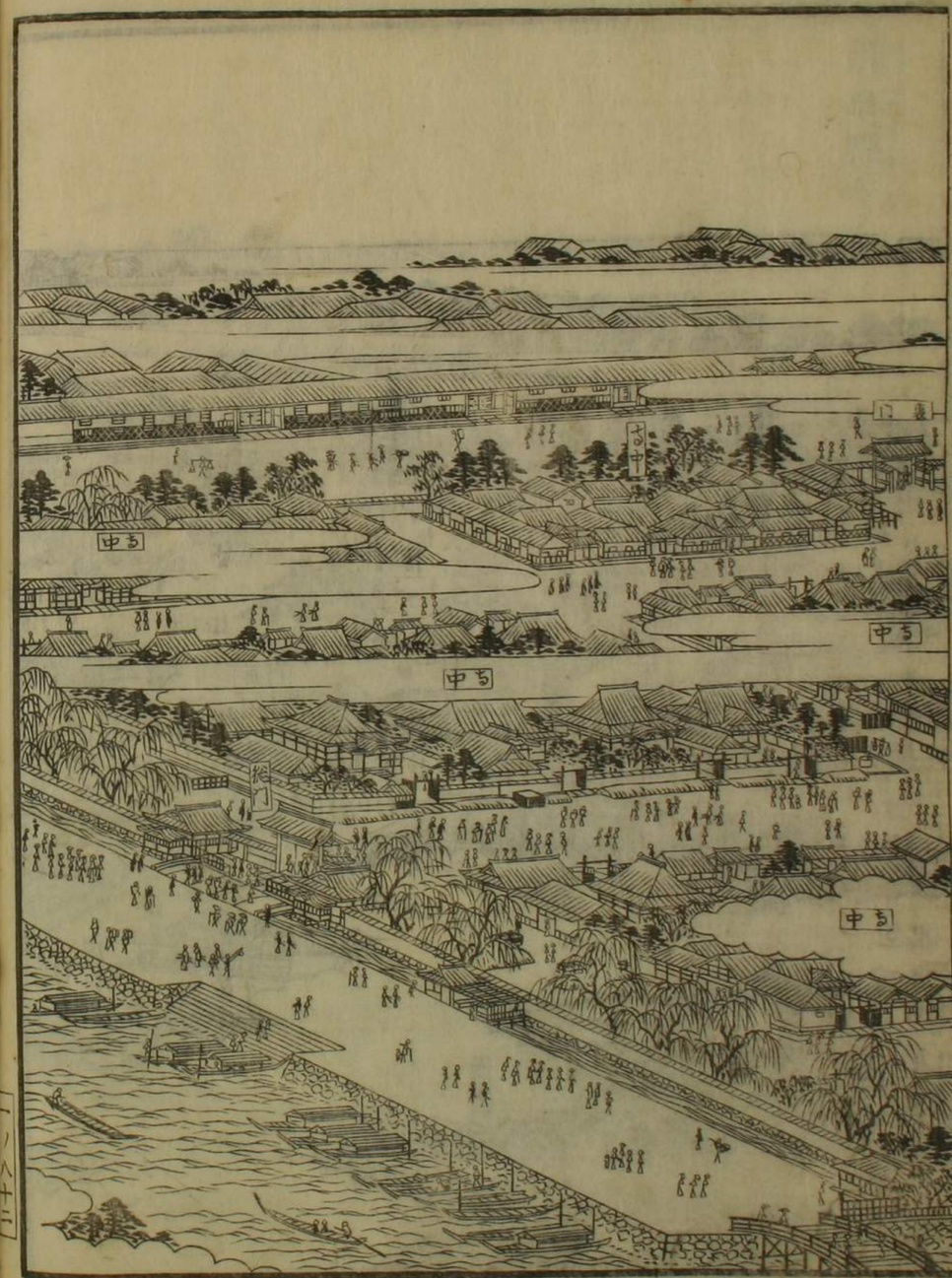
立花會十一月廿八日開山忌〻〻七昼夜の法會修行あり是ハ

報恩講と云又俗間浄講と称す

采女ヶ原　木挽町四丁目より東の方此所ハ馬場あり常に賑しく

講釋師浄瑠理の新八軒を並べ〻〻行人の足をとゝむ享保九年

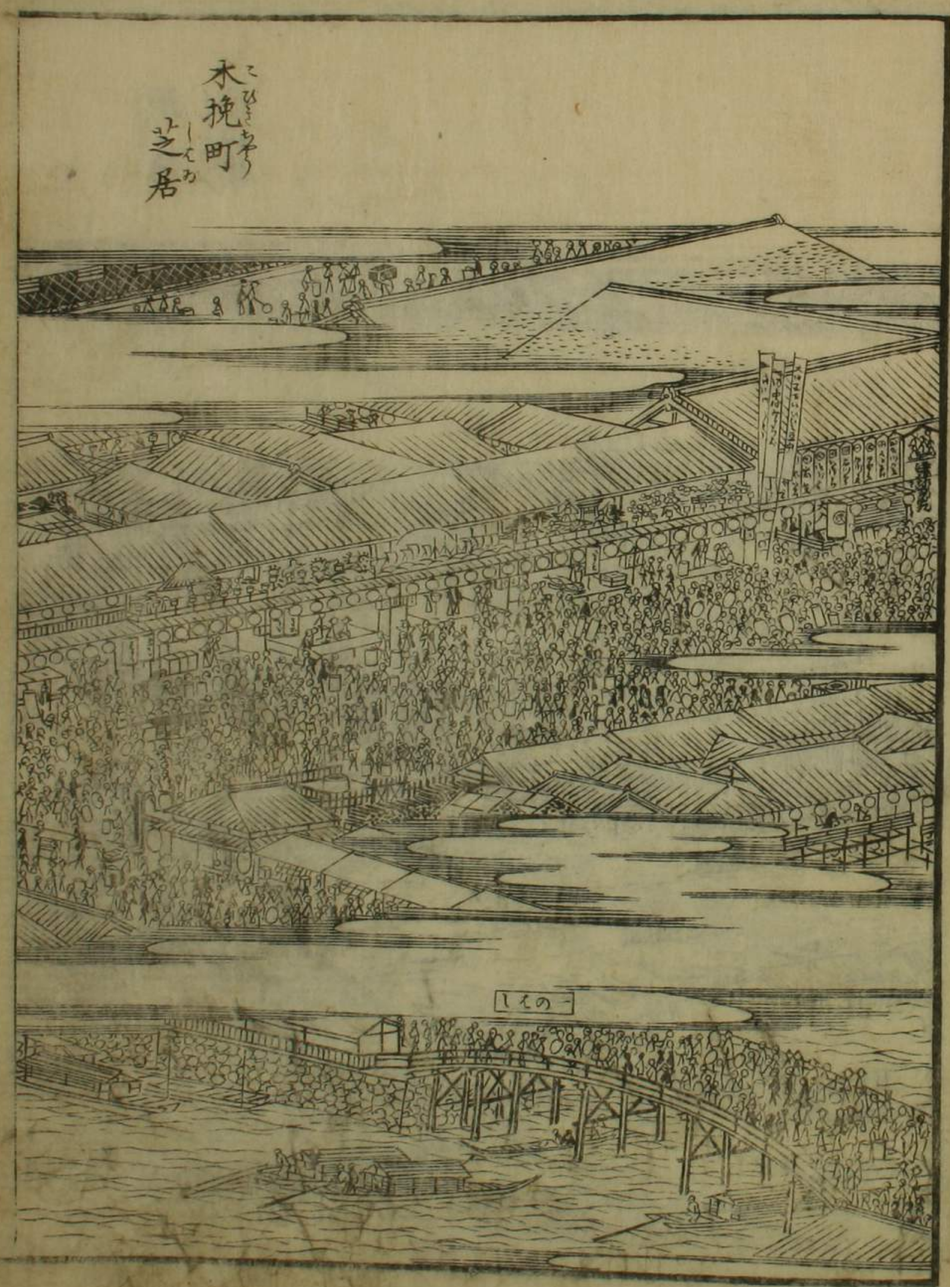
迄此地に松平采女正定基のやしきあり〻〻同年正月晦日

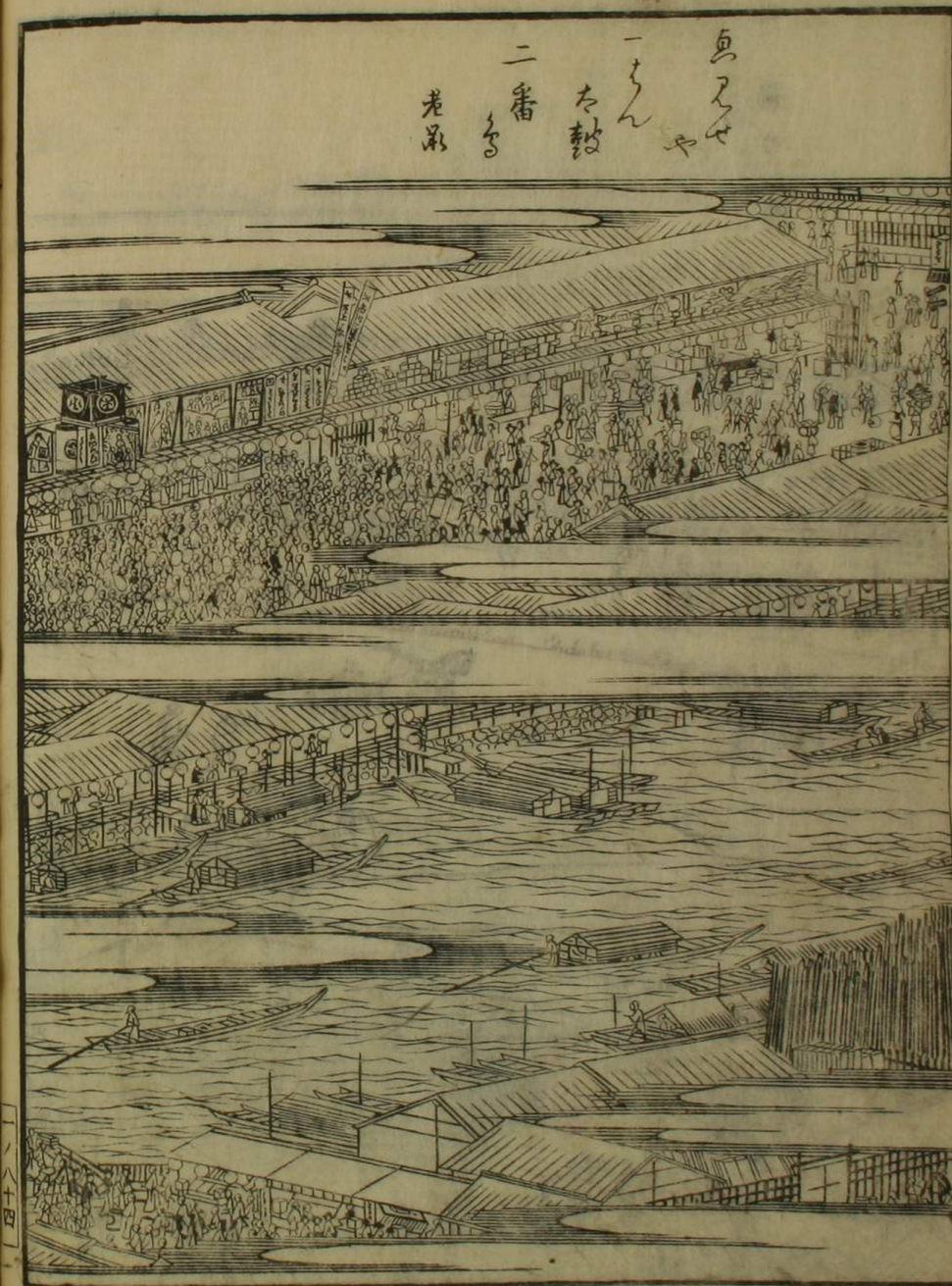


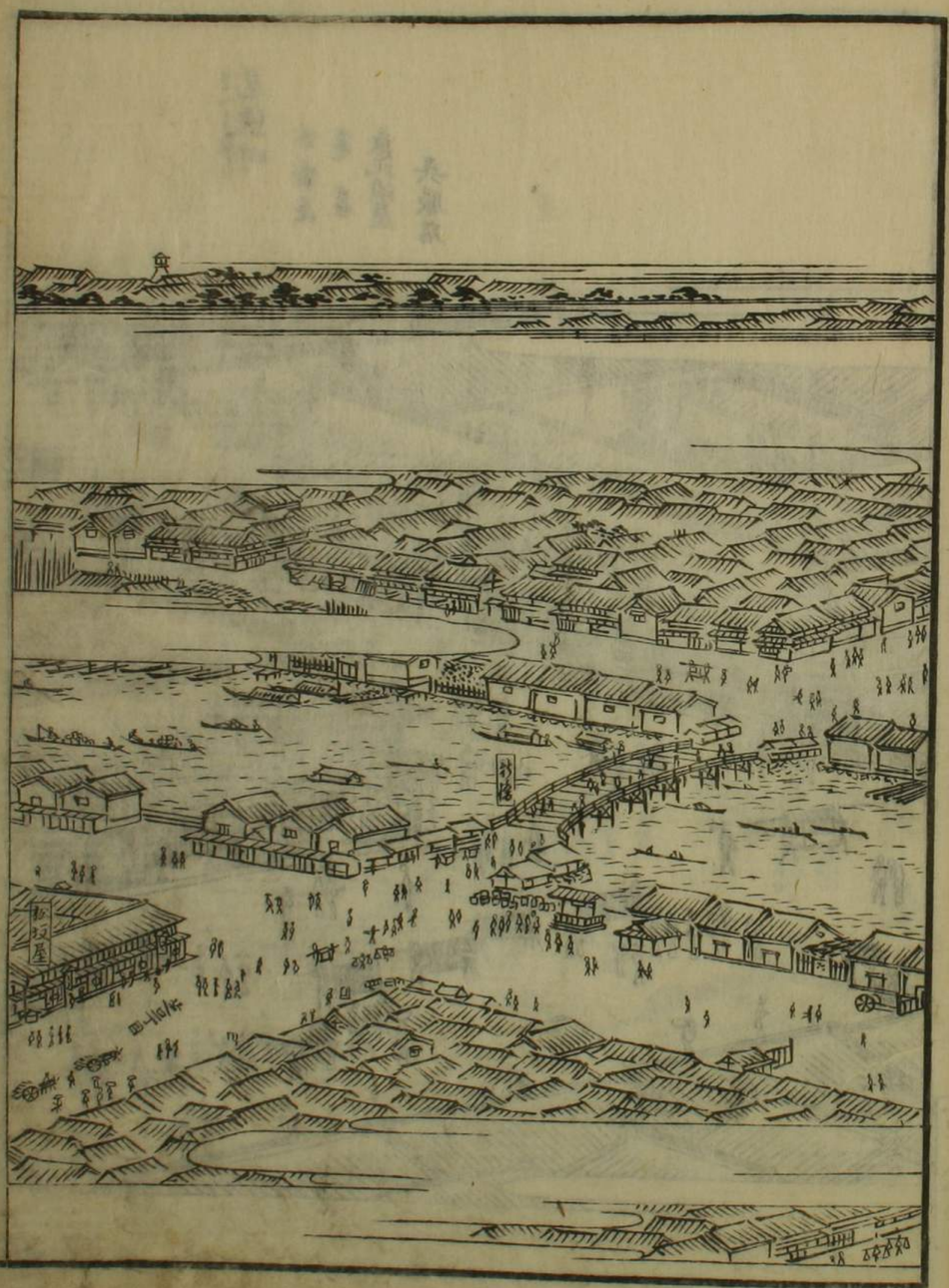
采女ヶ原

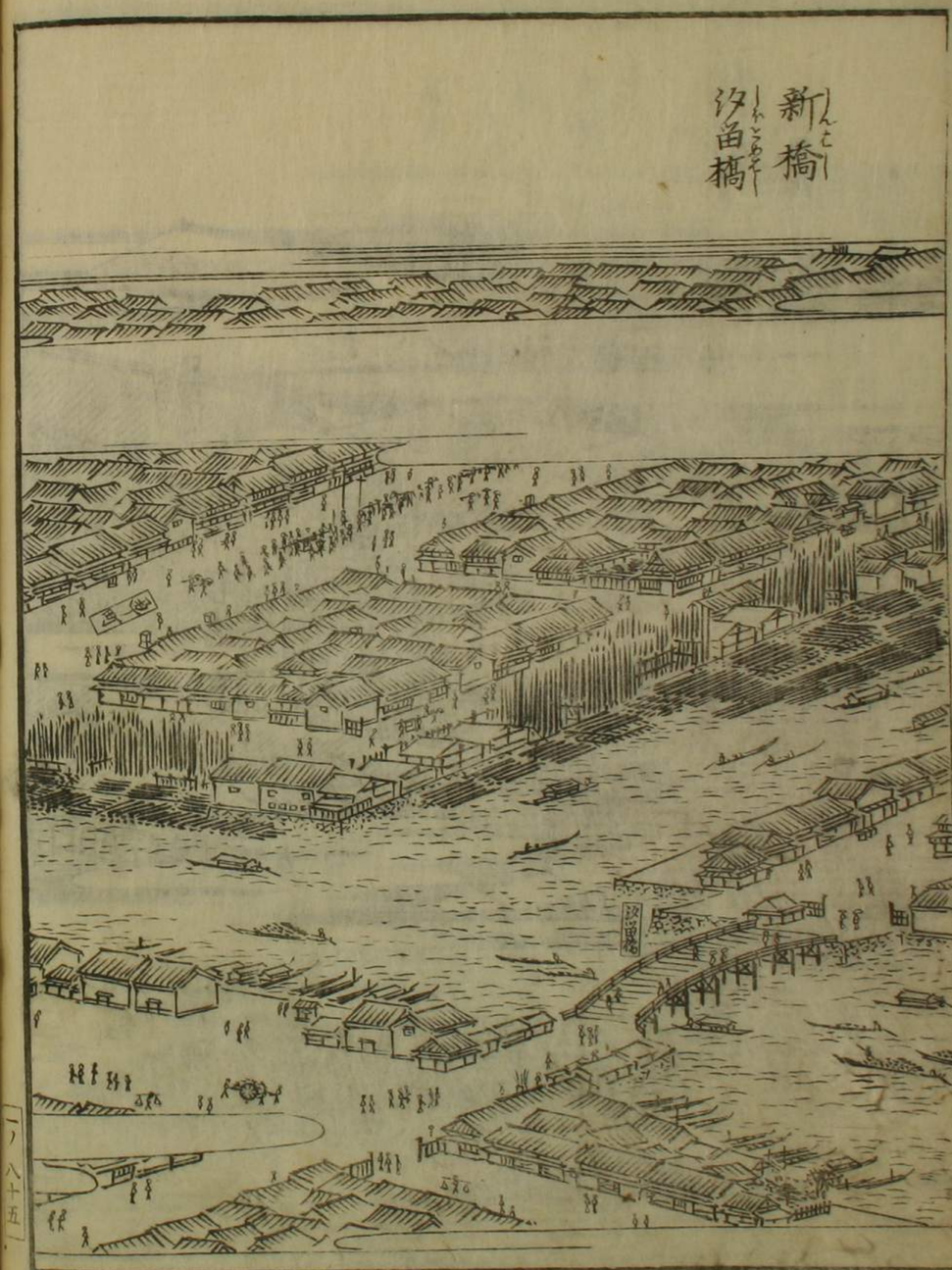
西本願寺

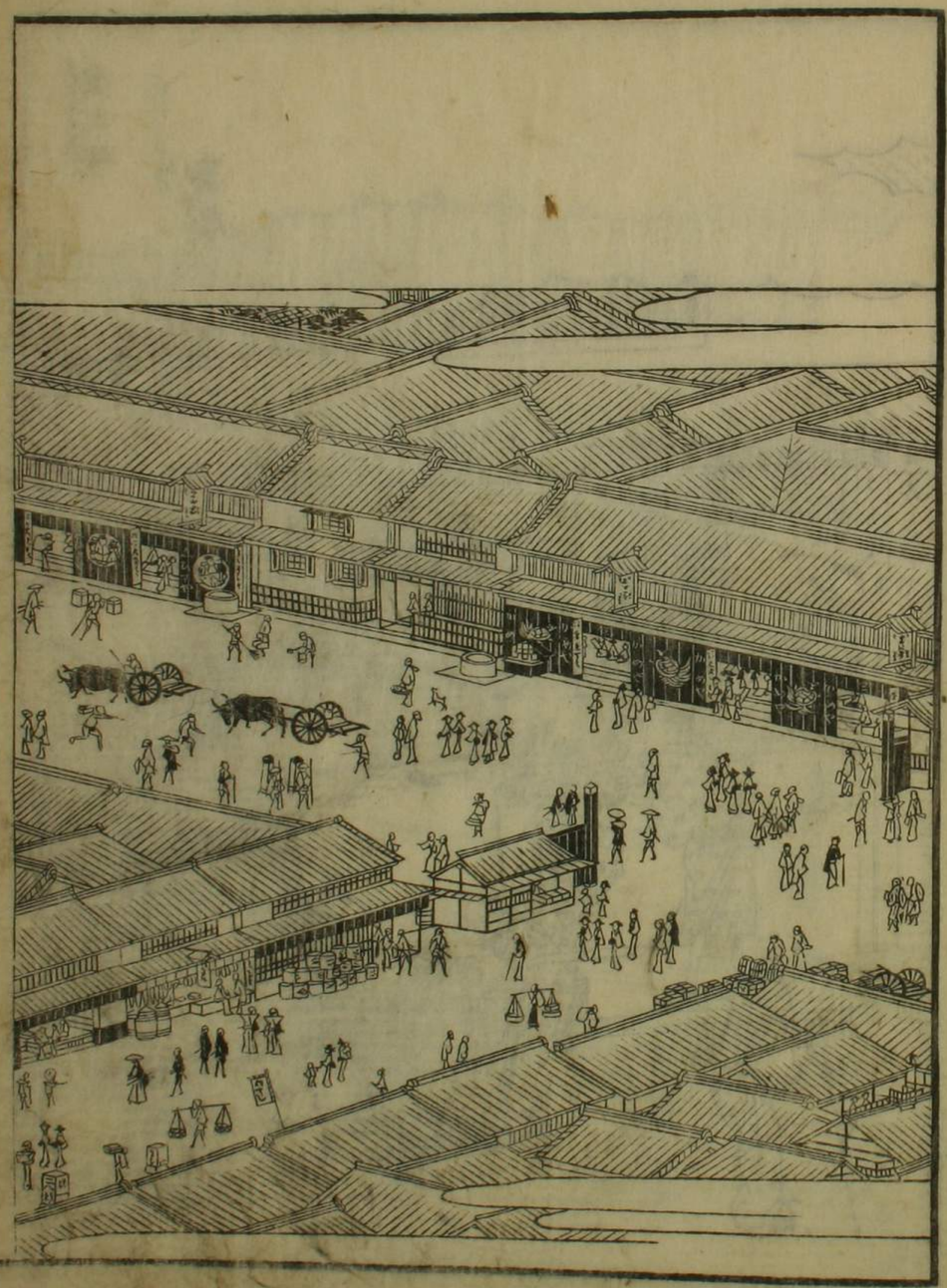
五条橋


木挽町
芝居
しゐの一

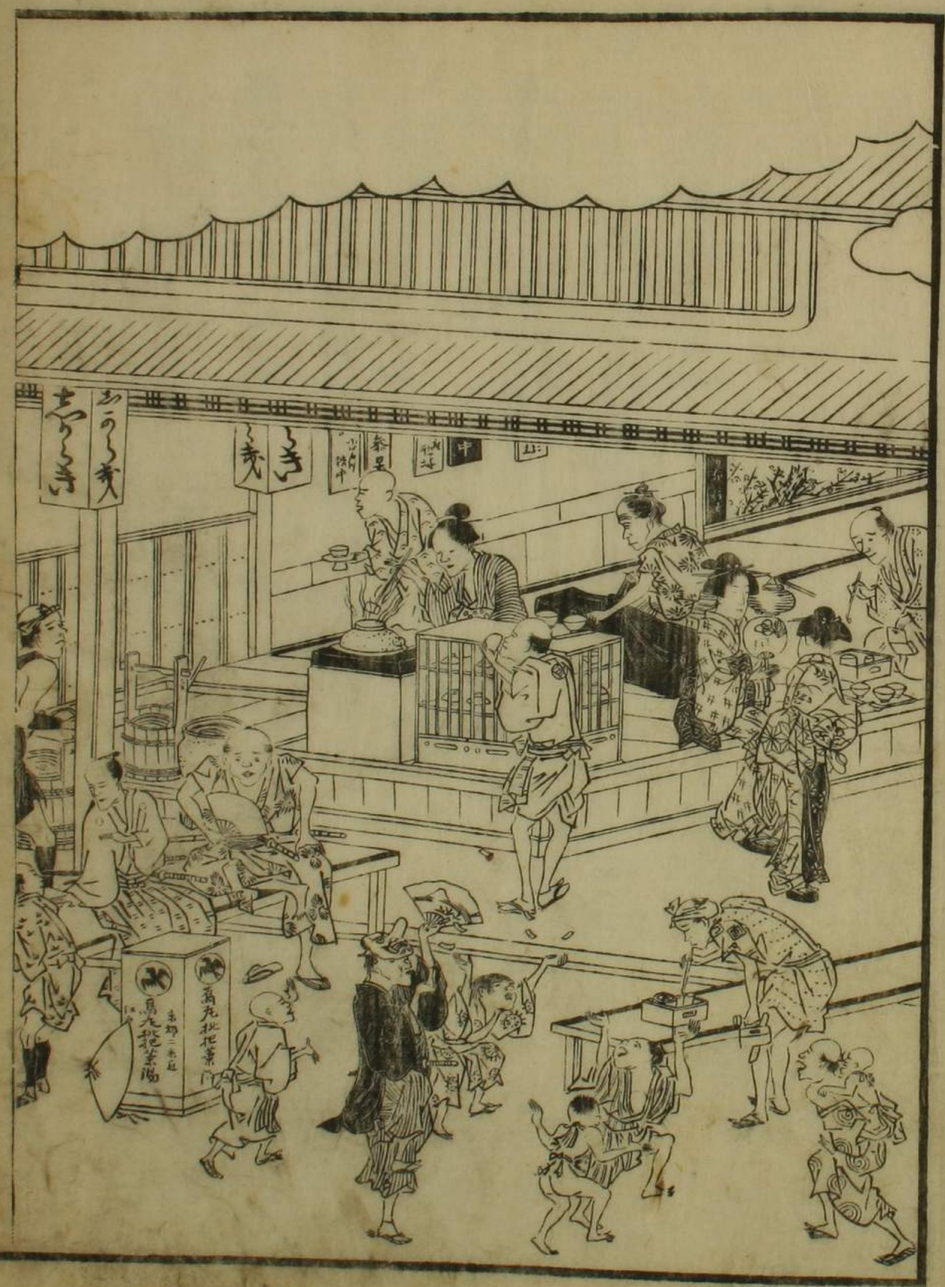

二番
老鼠


沙海
松坂屋


新橋
汐留橋



をわり
尾張町
市袋屋
亀屋
恵比須屋
呉服店



金六町
ちゃ〜〜きや
茶店

火災の後やきハ麹町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃に跡へ新ゝ馬場を開くるとなり馬場の地ハ天明五年今の芝西應寺町その代此所の井を采女の井とゝもに彼やしきの用水なり加ふるに名つくるなり

哥舞妓芝居

水挽町五丁目ゝあり今森田勘弥の哥舞妓芝居綿〻と相續す芝居の基原ハ堺町葺屋町哥舞妓芝居の条下ゝ詳なり昔ハ此所六丁目ゝ山村長太夫と名代の狂言座あり中村市村森田等の芝居をあハせて

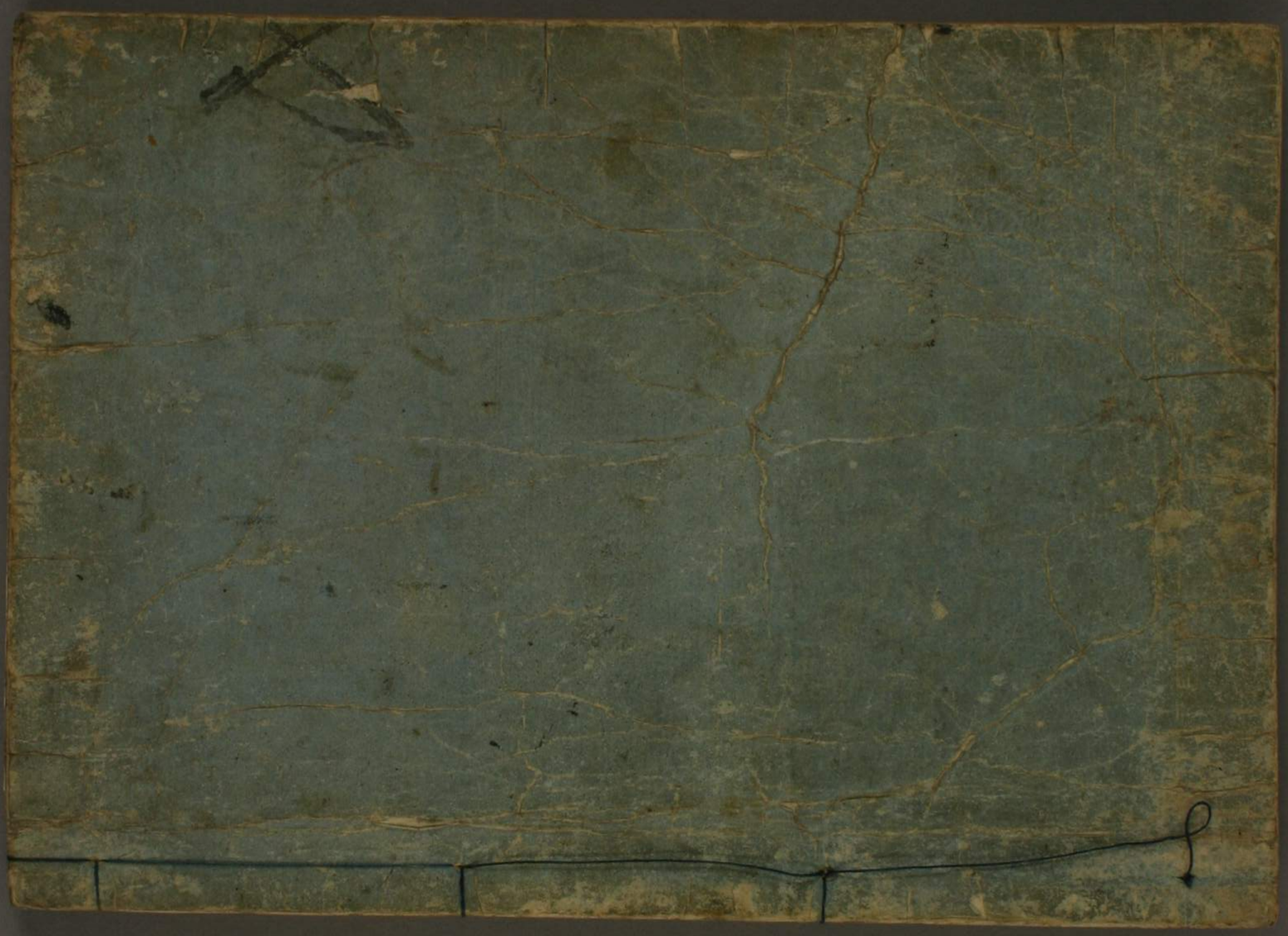
まく〻四座あり〻と正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらる山村長太夫座を初めハ岡村長吉清と云実子なく使子七十郎と云を養て子とす二代岡村五郎左衛門是なり後ゝ名を改て山村長太夫と云是も女子のみあり〻しかハ婿を取て相續す此時ゝ至りて断絶せり芝居ハ正保元年申歳ゝ始まるゝそ東海道名所記ゝ木挽町ゝ喜太夫ゝ浄瑠璃理外異類異形のものをえんせるゝあるとハ昔ハ狂言座の外ゝ見せ物の事なり

織田有楽斎弟宅地

元数寄屋町の地なりと云慶長の頃此地を織田有楽斎ゝ賜ハりしゝ後ハ空地となりく三四丁ゝ程芝生となり春を摘草夏ハ池水ゝ涼をとゝく其頃ハ林泉の形も残り殊更櫻楓ホの二樹多く春秋共ゝ遊望の地なりく寛永の頃迄ハ折ゝあるとく大樹此地ゝ遊猟をなせられしゝとあり駿覚信長公の弟ゝ有楽斎名長益源九郎と称せ乃其軒と号ス法名此人茶道を利休居士ゝ受て一家の風あり元和七年ゝ卒せ後世土人数寄屋を建置れし旧跡なりとく数寄屋ゝ町の名ゝ残りとかり

新橋

大通り筋出雲町と芝口一丁目との間ゝ係る正徳元年辛卯朝鮮人来聘の前宝永七年庚寅此所ゝ新ゝ御門を御造営ありく芝口御門と唱へ橋の名も芝口橋と更らるゝ享保九年正月廿九日の火災ゝ焼亡せる後ハ復旧の町家とあられり此川筋の東木挽町七丁目と芝口新町の間ゝ架せるを汐留とゝ

正徳四年江戸図

江戸名所圖會天樞之上畢